銀輪軍曹の訓練手簿（仮）

籠の中の鷲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀輪軍曹の訓練手簿（仮）

【Ｎコード】
Ｎ４５９４ＢＴ

【作者名】
籠の中の鷲

【あらすじ】
少子化、エネルギー問題、有事に備えた軍事力の充足、食糧危機……様々な課題を抱えた２１世紀初頭から半世紀が過ぎた頃、日本は経済的には豊かでなくとも、殆どの課題の解決に向けて軍事国家として復興を見せていた。
独身男子を容赦なく兵役に駆り立てる懲罰大隊制度、独身女子を容赦なく農業従事させる勤労農村制度。燃料と公共交通機関はすべて国の管理下となり、原発は完全停止、閉鎖され、自然エネルギー化を促進した。

道路から自動車が消え、自転車と馬車が走り、人の移動は緩やかになりつつある。

農本思想を基に農業の復興が進み、海外産業に依存しない自己完結国家を目指し、閉鎖的な古き良き時代へと退化していく日本。

これはそんな近未来を舞台に日々を過ごす、平凡（？）な陸軍下士官の物語である。

0　昔々のお話です。（前書き）

初投稿です。

この先の連載で突っ込みどころが多々存在すると思いますが、どうか温かい目で目で見守っていただけると幸いです。

0　昔々のお話です。

今はいない祖父から聞いた話では、昔は一家に1．2台の自家用車があって、一般人は3ヶ月も講習を受ければ免許を取得し、好きに乗り回し、一部地域の道路では渋滞が起こっていたらしい。燃料も金さえあれば誰でも買えたのだとか。

鉄道もバスも、ほぼ民間が運営していた。馬なんていなかった。

軍隊は完全な志願制で、どんなに理由をつけても徴兵なんてできなかったそうだ。

食料自給率が低いくせに、飽食の時代とか言われていた。

原発事故なんてものが起きたらしい。あんな危険なもの、どうしてもっと早く廃止しなかったんだ？

少子化が深刻で、そのくせ子供を作らない自由、結婚しない自由もあったんだっけ。

後先考えない、自分が死んだ後の世代のことなんてどうでもいいって思ってたみたいだ。そのときの世代がどうにかしてくれる、夢のような新しい科学技術で解決できる……お気楽な未来を想像して、現実から目を背けていたのかな。

祖父から聞かなくても、そのくらいの歴史は義務教育でウンザリするほど習った日本史だ。

あらゆる分野で新技術が確立される中、対戦の危機が迫り、弱腰の政治を見かねた軍隊が動き、奇跡的な改革が実現した……んだっけか？

そんな祖父が現役だったころから、半世紀ほど流れた。

『富国強兵』のスローガンの下、この国はだいぶ変わったのではないか？

0　昔々のお話です。（後書き）

とりあえず、主人公の回想……みたいなものです。

1　人事発令通知（前書き）

私ごときに近未来が書けるだろうか？
見切り発車の暴挙、どうか暖かく見守ってください。

1　人事発令通知

「かしら、中！　直れ」

桜が咲き始めたとはいえ、まだまだ肌寒い3月半ばの朝。０８００の国旗掲揚は、先ほど終わったばかりだ。

駐屯地本部隊舎屋上では、遠く陸軍大学校から任務を終えた3人の下士官が部隊長に原隊復帰の申告を行っていた。

「申告します。陸軍軍曹・稲葉　博人、他2名の者は、複律２０年9月１０日から、２１年3月１５日までの間、陸軍大学・銀輪機動運用研究室に特別研修生として研修中のところ、研修課程修了につき、原隊復帰を命ぜられました。

かしら、中！　直れ」

横隊の最右翼、３人を代表して申告するのは２７歳の若手軍曹・稲葉　博人だ。寒さでガチガチと鳴りそうな歯を何とか制御しつつ、お決まりの申告をどうにか済ませ、もっと暖かい格好をすれば良かったと一人脳内で後悔する。

駐屯地屋上から見て西に４キロの山系には、百周年続く風力発電所の風車が何十台と見える。そこから吹き降ろされる強風は、容赦なく博人たちの体温を奪っていく。せめて空がほぼ快晴で、風さえやめばポカポカ陽気であるだけマシだったといえる。

「休め」

部隊長だした指示に、博人は他2名にすかさず号令を出す。

「せいれーつ、休め！」

事前にした予行どおりに、三人は揃って足を肩幅に開いて手を後ろに組み、続けて部隊長を注視する。

清々と整った動作に、部隊長はとても気持ちよさそうにうなずくと、おもむろに口を開いた。

「約半年間の任務、ご苦労だった。君たちが参加した研修、特に銀輪機動は歩兵部隊にとって……」

正直なところ、申告が終わったらとっとと帰りたかった博人たちであったが、部隊のトップに立つ人間というものは、任務や訓練を終えた隊員に対して訓示や指導、労いの言葉をかけるという仕事がある。

たとえそれが隊員たちにとってウンザリするようなことであっても、その仕事は全うしなければならない。

そして博人も、部隊の中の一下士官として、自分たちの部隊長の今後の方針や指導を聞き取り、事後との訓練や作戦に生かしていかなくてはならないのだ。

若干小刻みに震えだした体をどうにか抑えながら、唇を青くしつつ拝聴する博人だが、……早く終わってほしい。

「……今回の任務で貴重な経験を得た諸君らの活躍に大いに期待する。終わり」

数分間の訓示がようやく終わったのを察して、博人はすぐさま不動の姿勢をとり、号令を出す。

「気を付け！　かしら、中！　直れ」

部隊長が付き添いの下士官を連れて屋上を去るのを横目で見やり、扉から隊舎に入るのを確認すると、博人は他の2名に向き直った。

「事後の行動にかかれ、別れ」

「「分かれます」」

一同はそれぞれの中隊に申告終了を報告すべく、屋上の出入り口の扉に向かう。

階段を下りる途中で、博人はギョッとしてすぐさま不動の姿勢をとった。

「敬礼！」

先に発したのは、博人の前を歩いていた伍長だった。

博人も慌てて、彼に向かって敬礼をする。

そこにいたのは、中佐の階級章をつけた、５０半ばくらいにみえる初老の男だ。

下士官以下の軍人は、通常将校を認めた場合、すぐに敬礼をする

のが規則だ。ましてや相手は、先ほど申告をしていた部隊長と同等の階級章を付けている。

部隊長の来客だろうか？　駐屯地では見たことのない将校だ。

この初老の将校は、３人に答礼を返すと同時に、ふと興味深いものを見つけたとばかりに目を細めた。

視線の先は、博人である。

「君が、稲葉軍曹かね？」

「はっ！」

名前を呼ばれ、博人は改めてその将校に正対し、不動の姿勢で答える。

それにしても、なぜ名前がわかったのだろう？　確かに博人の軍服の胸元には名札がついているし、襟には階級章もついている。だが、目算でこの将校殿とは５メートルは離れており、名札は小さい上に、背中には屋上扉からの逆光を浴びている。それでも見えるというのなら、この爺さんは相当目がいい。

て、ゆうか、この人、君が……って言ったよね。俺のこと知ってるのか？

「中佐殿は、私をご存知で？」

つい首を傾げそうになるのを押さえつつ、博人は将校の反応を待つ。

彼は博人をまじまじと見つめながら、そばに控えていた伝令の鞄から１冊の小さな冊子を取り出した。

それは、陸軍大学の広報室が発行している文集で、博人が研修員の課題として論文を投稿したものだった。

「君の論文、読ませてもらったよ。実に興味深い内容だった。」

「光栄です。」

見ず知らずの将校とはいえ、中佐ほどの上官から褒められるのは喜ばしいを通り越して緊張を催すほどの衝撃を受けた。

「ところで、稲葉軍曹」

中佐はふと、何かを思い出したかのように一瞬目を見開いたかと

思うと、なにやら神妙に問うた。
「君、年齢は」
なぜ年齢？
意図の見えない質問に一瞬思考が停止したが、すぐに気を取り直し答える。
「２７です」
「ふむ……独身かね？」
なぜそんなことを聞くのか？　しかし、今度は間を置くことなく答えた。
「はい。」
「結婚の予定は？」
「ありません」
「彼女は？」
「いません」
「そうか……、さみしくないかね？」
「いいえ、とくには」
何を聞いてきてるんだこの中佐は？
「う～ん、そうかそうか。いや、ごめん。変なことを聞いて悪かったね。」
中佐はなにやら一人でウンウンと頷きながら、階下へと降りていく。行き先は、部隊長のいる大隊長室だろうか？
３人は呆然と彼を見送った後、ふと前にいた伍長が何かに気づいたように目を見開き、博人を見た。
「稲葉軍曹、２７なんですね」
「まあ、今年で２８だけどね」
何のこっちゃ？と、博人は首を傾げたが、隣に立つもう一人の下士官、同じく伍長が、何かに気づく。
「軍曹、あの噂、知ってます？」
隣の伍長の言葉に、目の前の伍長の顔がひきつる。
その反応をみて博人はある不吉な噂を思い出す。

「いや、ないない。俺は何にも悪いことはしてないよ。こうして、きちんと国家のために忠勤してるじゃないか。」
バカバカしいと鼻で笑い、博人は歩き出す。
「しかし、噂はどうあれ、軍曹、そろそろ結婚したら？」
「そうですよ、軍曹。２７で独身、予定もなしなんて、さすがに寂しすぎですよ」
後ろが騒がしい。そういえば、２人とも既婚者だっけ？
「何のために俺が軍隊入ったと思ってんだよ。だいいち、あの噂が本当なら、俺のタイムリミットはとっくに過ぎたっつーの」
余計なお世話だといわんばかりに、博人は歩く速度を上げる。

しかし数日後、博人は自分の耳を疑うことになる。

『人事発令通知
陸軍軍曹・稲葉　博人。第２懲罰大隊付銀輪指導官に任ず
移動完了、複律２１年３月３０日』

1　人事発令通知（後書き）

この小説のメインである近未来事情については、次回から書いていくよていです。テーマがテーマなので、多大な矛盾やご都合主義が出てくると思いますが、なにとぞご容赦ください。

2　軍曹・稲葉博人の学生時代（前書き）

学生時代の博人の回想と葛藤、そして、懲罰大隊についての説明だね。

2　軍曹・稲葉博人の学生時代

小学生時代、将来の夢という作文を書いたことがある。
なんて書いたかは忘れたが、きっと夢にあふれた内容だったと思う。
父親のような教員になるとか、学者になりたいとか、祖父のように何か特別な技能を持った職人だったか……、案外近くの農家で特産品の野菜作りとかも考えていたと思う。
ただなんとなく仕事をして、結婚して、多くも少なくもない給料で家族を養って……周囲の大人を見ながら、漠然と自分もそうなるのだろうと、博人は思っていた。
そんな漠然とした未来像が変わったのが、中学に入学した頃だ。
この国の指針について、だいたい皆この頃、意識し始める。
社会科の教師は熱心に語り、進路指導担当者は真剣に指導を始める。

『富国強兵方針にともなう国家繁栄の重要項目』
1、少子化抑止
2、食料自給率の向上
3、軍事力、特に歩兵戦力の充足

半世紀前の平成の頃、どうにかしたくてもどうにもならなかったこれらの課題に対して、改正された現在の憲法では国民の義務として、「富国強兵に寄与する義務」というのがある。
それを促進する具体的な策として、政府は画期的な制度を確立する。
それが、『懲罰大隊制度』と『勤労農村制度』である。
軍籍に属さない満27歳の独身男子は陸軍の懲罰大隊で兵役に、満27歳の独身女子は国営の勤労農村にて農役に、強制的に従事さ

せられるのだ。さらに、結婚から3年以内に子供を作らなかった場合、5年以内に離婚した場合、正当な理由がなければ兵役もしくは農役、重い場合は懲役刑も覚悟しなければいけない。

平たく言えば、国は国民に対してこう言いたいのである。

「若いうちに結婚して子供（未来）を作り繁栄に寄与するか、嫌なら国勤（国防と生産）に従事して身をもって国家の礎となれ」

中学・高校時代、進路を語るのであれば、結婚をいつするかは重要な課題であった。

博人は特にこれに頭を悩ませた。

結婚とは何か？　考えて嫌になる。

崖っぷちの27歳の担任のデブが結婚したときいて、どんな奥さんだろうかと見に行ったら、担任に負けず劣らずのデブスだった。

夫婦に幸せそうな顔はなく、妥協と諦めがアリアリとうかがえた。

あんなふうにはなりたくない。

過去の偉人の言葉が、脳裏を過ぎった。

結婚とは、その実態やいかに
人生の節目　人生の分岐　人生の妥協　人生の墓場

博人は極端に容姿が悪いわけでもなかったが、何か特別な才能があったり、皆に期待されるような将来有望な存在でもなく、モテるわけでもなかった。

将来、結婚相手を選べるほどの余裕があるとは思えなかった。自分ももしかしたら27歳を迎えたとき、あの担任のように妥協しまくって、諦めて、ただ何かの作業をするように好きでもない女と子供を作って、さほど多くない給料でそんな家族を養いながら、細々と暮らしていくのではないか？

そんな自身の未来像が脳裏を過ぎり、身震いした。

いや、そうでなかったとしても女はとにかく面倒くさい。我侭で

ちょっとしたことでヒステリーを起こすし、何より話がなかなか合わない。一緒にいると疲れるばかりだ。

そうなるくらいなら、潔く懲罰大隊で兵役につこうかと考えたが、やめた。

たしかに、衣食住は最低限保障される。国のために戦う兵隊をかっこいいとも思った。任期は4年……それだけ耐えればいいはずだ。

だが、懲罰兵はまったくかっこいい兵隊ではなかった。

有事の際は背中に地雷を背負い、旧式小銃と数十発の弾をもち、蛸壺から出られないように足かせをつけられて配備され、時間稼ぎの捨て駒にされる……というのが、当時の社会科の授業で聞いた懲罰兵の姿だった。携帯電話も通じない山の中に駐屯し、毎日尻を蹴られながら訓練をし、豚の餌のような食事と週に2回の入浴が唯一の楽しみだったという、週刊誌の記事も思い出す。

だめだ。そんなのは嫌だ。

そんなとき、はたと気がついた。

社会科の教師が、制度にかかわる条文を読んでいた時だ。

「……軍籍ニ属サヌ満27歳ノ男子ハ……」

「!!!」

……軍籍!?

「先生！　軍に入隊すれば、結婚しなくていいんですか?」

「ん…稲葉、質問があるならちゃんと挙手しなさい。……まあ、そうだな。懲罰大隊にいくまでもなく、軍人として国家への忠勤を果たしている以上、制度上は特例として認められているな。」

そうだよ……その手があったよ。

懲罰部隊じゃなくて、普通の軍隊なら待遇はまったく違う。結婚しなくてもいいうえに、社会的にも認められた地位につくこともできる。

「あー、でも、稲葉。その場合、ちゃんと下士官になるんだぞ。上等兵どまりだと、数年で除隊だから、再就職はいろいろきついぞ。

除隊した歳が27より若かったら、懲罰大隊だぞ。」

下士官……上等だ。そのくらいなら、まだ努力でどうにかなるだろう。

そのあと、先生が何を言っていたのか、博人にはもう聞こえていなかった。

ただこの日から、博人は将来に向けた確固たる目標を持って勉学に励んだのは確かである。

そして、高校を卒業した博人は軍に入隊したのだ。

3　中隊長面接（前書き）

人事発令通知が発せられる前日のお話です。

3　中隊長面接

「稲葉軍曹、入ります」
「入れ」
中隊長室のドアをノックすると、中から聞きなれたハスキーボイスが返ってくる。
ドアを開けると、奥の机でお茶を啜る中隊長の姿があった。
帰り支度はすでに済んでいるらしく、迷彩の戦闘服から、将校用の軍服へと着替えを終えていた。机の上には、すでにまとめられた通勤鞄と閉じられたパソコンしかない。
中隊長は博人に室内中央の手前のソファを勧めると、テーブルを挟んで奥側に座った。
まだ３０半ばにして階級は中尉、柔道をやっていたとかで、餃子のように膨らんだ耳が特徴的で、坊主頭には大きな縫い跡が目立つ。声はドラマ俳優並みにイケメンだが、軍服を着ていなければヤクザにしか見えないようなこの人が、博人の所属する中隊の中隊長だ。
原隊復帰した翌日、国旗降下の終わった終礼後、博人は中隊長の呼び出しを受けたのだ。
長い話になるのでまず夕食を食べてから部屋に来なさいと言われ、博人は何事かと思いながらこうしてこの部屋を訪れたのだった。
ソファに座ると、中隊長はおもむろに1冊の冊子をテーブルの上に置いた。昨日、例の中佐が取り出したものと同じやつだ。
「研究室ではよくがんばってたそうだね。いや、俺もこの論文読ませてもらったよ。教育や機動訓練の各種改善事項や、将来の展望、特に現地の地理学者と各種経路の特性を兵用地誌に組み込む試みは今後の大きな課題になるだろうな。」
「はい。ありがとうございます」
褒められるのは、結構照れる。
「それでな、もうこれは決定事項なんだが……軍曹、栄転のお知ら

せだ」
「は？」
今、なんつった？　決定事項？　栄転？
「じきに正式な文書で通知されるが、稲葉軍曹、第２懲罰大隊の大隊付銀輪指導官としてお前に白羽の矢が立った」
「え……、ええっ！！」
懲罰大隊！？　なんで？　俺、なんかやったっけ？
懲罰大隊には、懲罰兵の他に、分隊以上を指揮する指揮官として一般の軍人が勤務している。しかしその多くは、軽微な服務違反者が多く、文字通りの軍隊における懲罰組織としての機能も持っている。懲罰兵に比べれば一般軍籍の兵隊は指揮官を務める以上マシな扱いではあるが、それでも懲罰大隊の駐屯施設の環境は劣悪であると名高い。
「期間はとりあえず４年。長くても＋２年程度だろ」
「４年！？」
それって……普通に懲罰兵じゃん。
博人は、ふと人づてに聞いた噂を思い出した。

２７歳を迎えても結婚していない軍人を懲罰大隊に理由をつけて異動させ、結婚しない軍人の見せしめにしてやろう……って気運が最近あるんだってさ。

「ちょっと待ってください！　何で俺なんですか？　銀輪指導官なら、もっと適材いるでしょ！　３中の小森曹長とか、砲兵中隊の佐野軍曹とか？　大隊規模の指導官なら、曹長くらいの階級かある程度年配のベテランでないと勤まらないですよ！」
「そうは言ってもね……君、独身だし扶養家族いないから、転属させやすいんだよね。向こうさんも上級の銀輪資格持ってるのが欲しいって言ってるし、稲葉軍曹が一番適材なんだよね。それに、最近の気運というかね……まあ、言い方悪いけど人柱を立てたいわけよ。

」

結局最後のが本音だよな。

博人のように、結婚しないことを目的に軍隊に入隊するものが最近増えてきており、軍としては悩みの種となっていた。

何が悪いかといえば、単純に少子化の一因になりかねないということだ。

陸軍歩兵の給料は一般的にそこまで低賃金ではないが、家族を養っていくにはギリギリの給与だ。しかし、生涯独身であろうと考えるなら、衣食住の保障された生活隊舎で暮らすものにとっては、多少の贅沢と十分な老後の蓄えを実現できる。博人もその考えを持つ一人である。

仮に途中で除隊することになっても、軍から再就職の支援は受けられるし、しばらく働かなくてもいいだけの蓄えをもっている。

ただ、生活ギリギリでも国の未来のためにも、忠勤をする者であっても子供を残して欲しいと思うのが政治家たちの考えのようである。

というわけで、軍籍だからといって結婚もなにもしないなら、ちょっと苦しい思いしてもらうよ……という見せしめをしたいのだ。

「とりあえずもうこれは、『決定事項』だから。今月末までには異動完了になるだろうから、逐次準備していってくれ」

「了解……しました」

中隊長の宣告に、博人はがっくりと肩を落としたが、かろうじてうなだれることだけはせず、現実を受け止めた。

そんな博人に中隊長は励ますように言った。

「いやな、確かに向こうは劣悪なところだろうけどさ、悪い話じゃないと思うぞ。本来こういう人事ってさ、俺と中隊の人事係でよく検討して選抜して、今回はなかったけど本人とも検討してやるもんなんだが、今回はちょっと異例でな。あちらの副大隊長自ら、お前を指名してきたんだ。これすごいことだぞ。中佐殿の名指し、一本釣り、ヘッドハンティングだ。この論文がきっかけらしいが、それ

だけお前評価されてるんだよ」
　中隊長は言いながら立ち上がり、博人の横に座って励ますようにバシバシ背中を叩く。節くれだった大きな手のひらの平手は、服の上からでも紅葉ができそうなくらい痛い。
　まあ、いらないから死んでこいよりマシか。向こうのご指名なら、待遇の少しはマシだろうか……？
　博人はそっとため息をつきながらソファから立ち上がる。
　中隊長は、頑張れよ、と親指を立てる。
　いや、異動までまだ期間ありますよ。
「では……稲葉軍曹は用件終わり帰ります」
「うむ、ご苦労」
　博人は退室の敬礼をして、中隊長室を出た。

　生活隊舎の自室に戻った博人はふと、昨日申告後の階段で会った出来事を思い出す。
「……え？　あれ？　中佐？」

3　中隊長面接（後書き）

この陸軍の階級についてちょっと説明します
下から
２等兵、１等兵、上等兵、兵長、伍長、軍曹、曹長、上級曹長、准尉、少尉、中尉、大尉、少佐、中佐、大佐、准将、少将、中将、大将、元帥
ちなみに、後々登場しますが懲罰兵には階級はありません。

今回は２話連続ですが、次の更新はいつになるかな？

4　自動車の消えた国　（鉄道編）　（前書き）

エネルギー問題……というより化石燃料問題に触れていきます。多くの研究では、今の自動車社会のままだと、あと２０年ほどでピークオイルを迎えるそうです。後、石油を電力に変換するのは、すごくもったいない使い方だそうです。

そしてそれに伴い私が考える陸軍と社会のあり方がこれです。

4　自動車の消えた国　（鉄道編）

博人の所属する第３３歩兵大隊は、東海地区防衛を担う第１０旅団の中にある基幹部隊の一つである。主としてＭ県を担任地域とし、旧軍（自衛隊）はおろか帝国陸軍時代からおよそ２００年続く駐屯地に所在し、各種イベントを催しては地域住民との交流が多いことでも有名だ。

しかしこの駐屯地でひときわ特徴的なところは、駐屯地施設の一部に駅が含まれているということであろう。

そのため鉄道を利用した兵員や物資の輸送に即時対応でき、緊急用車両の手配や臨時ダイヤの調整が直接調整できるという利点もある。

もともとは駐屯地も駅も別々の施設であったが、４０年前に鉄道の軍籍化が始まり、すべての鉄道が国家と軍の管理下におかれることとなった。

それに伴い、陸軍の各駐屯地が最寄の駅や鉄道路線を併合し、これを駐屯地の一部にしようとしたが、残念ながら殆どの駐屯地では実現に至っていない。

理由は現在の各駐屯地は旧軍時代から続く土地であり、旧軍は自動車化部隊という特性を持っていたために、鉄道よりも主要幹線道路の使用を重視していたからだ。そのため、駅や路線を飲み込めるほどの立地にある駐屯地は少なかったのだ。

しかし、平成が終わるころくらいで、自動車化部隊は衰退を余儀なくされてしまう。

否、自動車社会そのものが、衰退せざるを得なかった。

石油を中心とした化石燃料の枯渇が深刻となり、国の経済に深刻な、というよりも致命的なダメージを与えるほどに燃料費が高騰したためだ。

そのため、国はとうとう燃料統制と電力統制に踏み切り、現在で

はバイオマスも含めてなけなしの燃料で軍隊という防衛組織と鉄道を含めた公共交通機関を運営をしているのである。

早朝の、駐屯地外居住者（通称・営外者）たちが出勤する時間を見計らい、博人は生活隊舎を出た。

今日は懲罰大隊への移動日である。

軍服姿に背嚢を背負い、肩掛けタイプの大きな布製鞄という大荷物で、博人は駐屯地出入り口に向かう。

この駐屯地には出入り口が2つある。

1つは正門であり、ここは一般的な駐屯地のように駐屯部隊が当番制でつく警衛隊が出入りを監視する出入り口である。

そしてもう1つは、駐屯地の駅施設からホームへと続く改札口である。

この改札口の出入りを監視しているのは、同じ陸軍でありながら駐屯部隊とはまったく別の部隊である。

鉄道の軍籍化とともに創設された、“陸軍鉄道隊”である。

彼らの任務は鉄道車両や施設の管理と運営であり、簡単に言えば駅員だ。

しかし、れっきとした陸軍の軍人であり、有事の際には兵員や物資の輸送といったの兵站業務に従事するし、場合によっては戦闘にも参加してもらうこともある。平時は鉄道施設に限定された警察権も持っており、犯罪・テロ対策や事故対応の面で即応できるようになっている。

博人は中学時代の社会化の授業で習ったことだが、諸外国の場合は民間の警備員がいたり、駅構内に派出所があるので犯罪やテロにはまず警察官が即応するらしい。

改札口歩哨に敬礼をした博人は、続けて身分証明書と移動命令書を提示した。

通常の駐屯地出入りであれば、身分証明書と外出を証明する物（外出証、休暇証、通院証明書等）を提示するが、駅改札である以上

乗車券も必要だ。しかし、今回は移動命令書が外出証明と乗車券を兼ねている。

命令書を確認していた歩哨は、一瞬ちらりと博人を見た。

おそらく行き先（懲罰大隊）を見て、こいつ何したんだろう？と思ったのだろう。いいからさっさと通せ。

改札口を抜け、目当てのホームに向かうと、博人はホーム備え付けの時計を確認する。

目的の電車が来るまでまだ少し時間があるようだ。

肩掛け鞄を置き、ベンチに腰掛ける。

駅のホームには鉄道隊以外の軍人は博人以外になく、殆どが民間人だった。出勤・通学時間なのでこれが車両に乗り込めばたちまち満員になるだろう。

しかし、博人があえてこの時間を選んだのは、もうすぐ駐屯地に電車で出勤する営外者たちが乗ってくる、軍人優先車両があるからである。

まず間違いなくその車両に乗っている軍人の殆どが、この駅のこの駐屯地の隊員であり、彼らが降車すれば残されたガラガラの車両で、博人は確実にシートに座って移動ができるのだ。

ふと、博人は自分が勤務していた駐屯地の隊舎の方を振り向いた。

営庭に咲き乱れる満開の桜が目に入る。そういえば、今日から一般にも練兵場を開放して、お花見ができるようにするんだったかな。

まだ早朝のため少し肌寒いが、お昼にはいい陽気になって、絶好の花見日和になると新聞の天気予報にはあった。今週一杯が、この地域では最高のお花見シーズンらしい。

懲罰大隊への異動命令が出てから、博人は準備のために奔走し、花見をする余裕などなかった。中隊が送別会を開いてはくれたが、普段から利用している馴染みの飲み屋だった。

そして、この絶好の花見シーズンに、ここを去ることになってしまった。

「花見酒、したかったなぁ……」

ため息交じりの呟きは、電車の到着を伝えるアナウンスにかき消された。

4　自動車の消えた国　（鉄道編）　（後書き）

自動車の消えた国……はまだまだ続きます。

5　自動車の消えた国　（騎兵編）　（前書き）

鉄道の次は、公道を走る乗り物です。

5　自動車の消えた国　（騎兵編）

博人が懲罰大隊の最寄り駅を降りたのは、正午を少し過ぎたころだった。

近畿地方はS県にある、大きな湖を東に望むその駅は、水辺のそばだけあって昼間でもまだ肌寒い気がした。海風ならぬ湖風が駅舎を吹き抜けていく。

とりあえず、何か食べたほうがいいだろうと、駅周辺の屋台を巡り、たこ焼きと焼きそばを購入する。

駅周辺には大衆食堂も多かったが、背嚢に大型鞄を持って入るのはさすがにほかの客の邪魔になるので、軽食を購入してベンチで食べることにしたのだ。

この駅前から懲罰大隊のある駐屯地に向かうには、徒歩ではかなり遠い。

何か別のアシを見つけていくべきではあるが、博人の場合はその心配は一切なかった。むしろ、まず腹を満たして体力をつけることが優先だ。

一通り食べ終えた博人は、ベンチの横に置いた大型鞄に手を伸ばした……そのときだった。

「あの、すいません」

不意に後ろから声をかけられ、博人はそちらへと振り向いた。

そこには、博人と同じ下士官軍服を着た青年が立っていた。襟の階級章は彼が伍長であることを示している。

否、同じではない。彼の軍服のズボンの股部分には少し厚手の当て布がされており、腰の吊り帯から下げる軍刀は、通常の下士官軍刀より妙に長いく、両手剣に近い長さだが柄は片手剣のそれになっている。

軍刀は指揮官の権威の象徴であり、下士官であっても帯刀が許可される。しかし、現在の陸軍の服制では下士官軍刀は脇差程度の長

さ、おおむね1尺2～6寸程度とされている。通常の長さの軍刀を持つのは将校からだ。

博人も規定に習い、1尺2寸のものを帯刀している。ちなみに帯刀の義務はなく、購入も自腹だ。普通に買えば一振り10万円はくだらない。しかしそれでも帯刀するのは、多くの軍人にとって軍刀は一人前であることの証であり、また懲戒処分を受けた軍人は帯刀許可を失うために軍服で帯刀していない下士官は色々と誤解を受けるのだ。裕福な家なら出世祝いに買ってもらう者もいるが、博人の場合は退役下士官から安く譲り受けたものだった。

軍服の改造と階級不相応の帯刀は立派な軍規違反であるが、しかし一部の兵科を除いて例外が存在する。

博人が立ち上がり正面に立つと、彼は博人の階級に気づいたようだ。

すぐに姿勢を正し、敬礼をする。

「失礼しました。中部方面騎兵群、第1尖兵中隊、赤阪　輝樹　陸軍伍長であります」

「第33歩兵大隊、陸軍軍曹、稲葉　博人だ」

答礼を返しながら、博人は改めて赤阪伍長を見た。

年齢は博人より2つか3つ年下だろう。背が高く細身で、整った顔立ちをしているが、おかげで坊主頭がまったく似合っていない。軍服を着るより、ラフな格好でもして髪を伸ばしてきちんとセットすれば、俳優にでもなれそうなくらいのイケメンだ。

まったく強そうに見えない優男ではあるが、博人は彼の肩書きを聞いてやっぱりかと思った。

彼は“騎兵”である。それも文字通り、“馬に乗って戦うタイプの騎兵”で、中国・四国・近畿・東海の防衛を受け持つ中部方面隊直轄の精鋭、尖兵騎兵である。

鉄道の軍籍化が始まる少し前、この国には軍馬が復活した。

自動車の生産コストと燃料費が、軍馬の飼育コストを上回ってし

まったためだ。

軍馬と馬車は徐々に広まり、燃料統制が厳しくなると民間にも普及し、乗り合いの馬車や貸切の馬車タクシーも生まれた。自動車教習所も次々と乗馬教室に変わった。

多くの自動車会社が倒産したり、海外に事業を移してしまったが、中には国内で自動車生産に見切りをつけて馬車の製作に着手していた企業があり、大正・昭和期では実現できなかった技術力で画期的な乗り物へと変貌した。

さて、軍隊における騎兵は、砲騎兵、輜重騎兵、尖兵騎兵の概ね3種類に分けられる。

砲騎兵とは、軍馬を用いて野戦砲や弾薬を乗せた荷車を牽引し、戦地において砲兵として戦う機動性の高い砲兵である。

輜重騎兵とは、兵站任務を主として行う騎兵で、軍需物資を載せた荷車を軍馬を用いて牽引する騎兵だ。

また、軍馬を操る兵種として乗馬歩兵もあるが、これは移動手段として軍馬を駆り、戦闘の際には馬から下りて戦う兵種であり、歩兵に分類されている。

ちなみに、馬車の御車台から馬を操作する兵隊は騎兵とは呼ばれない。騎兵とは、馬に乗ってこそ騎兵だというのが、陸軍全体の認識である。

そして、もっとも精鋭とされるのが尖兵騎兵である。前述した2種類の騎兵と違って砲や物資を牽引することなく、戦闘時に馬を下りることなく、人馬一体で戦う騎兵である。

赤阪たち尖兵騎兵は、陸軍の中でも軍服姿が変わっている。

ズボンの股当ては鞍に跨ったときのスレ緩和であり、よく見るとわかるのだが、履いている軍用ブーツも鐙を踏みやすい造りになっており、博人のものとはデザインが違う。

長い軍刀は馬上から敵を切りつけるために特化したものだ。

尖兵騎兵の主要装備は馬上での取り回しに特化した騎兵銃（カービンライフル）だが、

それは戦闘服用の装備であり、一部の例外を除き軍服着用時には装備できない。しかし、尖兵騎兵の任務には式典の際の要人警護などもあり、戦闘服ではなく軍服を着用しなければいけない場合も多い。そのため、拳銃もそうだが、長めの軍刀を持つことになっているのだ。

それにしても、そんな尖兵騎兵がなぜこんなところにいるのか？

よりにもよって懲罰大隊の最寄り駅に。もう3つか4つ進んだ駅には、他の駐屯地もあるのだが？

考えられる理由は一つだ。

もしやとそれを博人が口にする前に、赤阪のほうが早く口を開いた。

「もしかして、稲葉軍曹も懲罰大隊へ向かわれるんですか？」

も……ということは、やっぱりこいつもか。

「ああ、そうだ……、って、どうした？」

博人が答えた瞬間、赤阪はいきなりガッツポーズをとり、すぐに駅前のある一点を指差した。

駅前のロータリーには、客待ちをしている馬車が数台並んでいる。タクシーだ。

「よかったら一緒に行きませんか？」

「ああ、そういうことか」

民間が運営する馬車には2種類ある。乗り合い馬車と馬車タクシーだ。都会では馬単体や馬車をレンタルすることのできるようなところもあるが、ここの駅周辺にはそういう店はなさそうだ。

さて、この駅から懲罰大隊のある駐屯地までの一般的な移動手段は2種類に限られたことになるが、まず乗り合い馬車は却下である。

乗合馬車は街の路線図に沿って走り、停留所で乗り降りする大衆向けの移動手段だが、懲罰大隊最寄の停留所から降りても、約3ｋｍは徒歩移動である。

一方で馬車タクシーの場合、駐屯地の門前まで運んではもらえるが、貸切運行のため料金が高い。決して手の届かぬ値段ではないが、

1人で乗るには少々懐が痛い。
よく見ると赤阪の足元には、大きなキャリーケースがある。手荷物のようだが、おそらく愛用の馬具であろう。背中には博人に比べれば小ぶりだが、背嚢も背負っている。これをもって停留所から2ｋｍも歩くのはきついだろう。
博人もそうであるが、通常部隊移動命令が出た際、軍の管轄する輸送便で荷物等は移動先に運んではもらえるが、到着が遅れることがある。おまけに、荷物の扱いが雑だともよく耳にする。そのため、博人も赤阪も最低限の日用品と貴重品、愛用品などは手荷物として運んできたのである。
なるほど、たしかに魅力的な話ではある、と博人は考える。
2人で料金を割り勘してタクシーに乗れば、これらの大荷物とともに駐屯地まで直行でき、おまけに料金も程よい値段ですむのだ。
しかし博人には、すでに目的地に向かうアシがあった。
「ごめん、俺、すでにアシがあるんだわ」
「はい？」
博人の言葉に、キョトンと首をかしげる赤阪伍長。
そんな伍長をよそに、博人はベンチの横に置いた大型鞄に手を伸ばす。
「ええっ！！　なんですかそれはっ！！？」
鞄の中から出てきたそれを見て、赤阪はギョッと目を見開き、驚きの声をあげた。
「陸軍最新鋭装備……の試作品。陸軍大学の研修の修了祝いに、処分するからあげるって研究室からもらったやつ」
博人は手馴れた動作で、“それ”を組み立てていく。
「27インチ型、重量10．25ｋｇ、対価重量は120ｋｇ、緒元上の軽装時の最高時速60ｋｍ、巡航速度はたしか時速20ｋｍか。両輪取り外し可能、ハンドル及びフレーム折りたたみ式」
説明しながら“それ”完成させ、収納していた布製鞄をなれた動作で折り畳み背嚢にしまうと、作動点検を終えて、博人はそれに跨

った。
「正式名称は……７７式歩兵銀輪車（試作型）だ。」
それは、１台の軍用自転車であった。
「こいつを使いこなせるようになるのは色々大変だったのでね、今日がこいつとはじめての公道デビューなんだ。悪いが、タクシーは他を見つけて乗ってくれ」
「あ……はい、お気をつけて」
唖然とする赤阪を残して、博人はペダルを踏み込み、懲罰大隊へと向かうのだった。

5　自動車の消えた国　（騎兵編）　（後書き）

書いた後で思う。

軍曹、ひどいな。

一緒に馬車に乗ってやって、初乗りは後日でいいんじゃないかな？

6　銀輪軍曹の着任（前書き）

ようやく、稲葉軍曹は懲罰大隊に着任します。

6　銀輪軍曹の着任

駅を出発した博人は、今更ながらに思う。

赤坂伍長には悪い事をした、と。

普通に考えれば、こうした自分の足で向かうよりも、馬車に乗ったほうが楽である。運賃の負担を考慮しても、荷物の量を考えればそちらのほうが効率的で経済的だ。

しかし、それでも博人が自分の足で懲罰大隊の駐屯地を目指すのには理由があった。

単純に自転車が好きだというのもある。

陸軍大学研究室で博人は様々な装備のモニターを研修の片手間で行っていたのだが、その中でも博人が一際気に入った装備がこの“７７式歩兵銀輪車”である。

大手の自転車メーカーの技術者と陸軍研究室が共同で開発し試作したその機体は、従来の折りたたみ式の結合部の強度不足を解消した結果で対過重１００ｋｇを超える強度を実現し、さらに陸軍歩兵を悩ませていたコンパクト化に成功した。これまで使っていた歩兵銀輪車は前後輪の着脱はできたものの、フレームの折りたたみは強度不足になる問題から折りたたみ自転車そのものがなかった。そのため、鉄道機動の際に車内持込が出来てもよほど整頓しなければ邪魔になったし、山越えの際には放棄して行軍せざる得ない場面もあった。しかし、コンパクト化によって車内持ち込みも容易になり、山越えの際には背嚢に縛着して行軍も可能となった。残る課題は軽量化だが、研究室の発表によれば、新型機は強度はそのままに７ｋｇ弱程度の重量で納まったらしく、すでに量産は開始されたと聞いている。

そんな新型機を、試作品とはいえ陸軍軍人として始めて公道を走らせるのだからたまらない。

ちょっとした段差を超えるときに手に伝わる、サスペンションが

衝撃を吸収する感触が心地よい。
スピードを上げて、ハンドルの変速レバーを操作し、さらにもう1段高みのスピードに切り替え、肌に当たる空気の感触が変わるのが面白い。一踏みで進む距離が変わると、見える世界も変わってくる。
立ち漕ぎをしない限り、背嚢の重量は荷台に預けられるので肩の負担は殆どない。
途中で何台か、民間人の自転車を追い越した。道路はだいぶ空いているので、何の気兼ねも要らない。スピードの乗りは快調だ。
「最高だ！」
風を切る中、博人は一人歓喜を叫ぶ。
２０分と経たずして、彼は懲罰大隊の駐屯するＡｂ演習場に到着するのだった。

第２懲罰大隊が駐屯するのは、通常の部隊のような駐屯地や分屯地、基地などではない。
この部隊が駐屯するのは、中部方面隊管区最大の演習場といわれるＡｂ演習場であり、懲罰兵やその管理要員が生活するのはその中にある廠舎と呼ばれる簡素な建物である。
どのくらい簡素かといえば、建物の外装はどこの駐屯地にでもある隊舎そのものだが、その内装はコンクリートと鉄筋がむき出しで各部屋を隔てる壁はなく、人数分の2段ベッドとロッカーが並んでいるだけである。　もともとは、演習にやってくる部隊が短期間宿営するために利用していた施設だ。
博人が案内された部屋は、第1中隊の下士官要員（副分隊長以上小隊先任下士官以下）が一部屋にまとめられた一室で、ぱっと見ても４０人が生活しているようだ。各ベッドの間隔は前後左右1メートル程で4列に並べられており、部屋の奥には補修跡の目立つソファーと年代もののテーブルが置いてある。隣の中隊要員の部屋とはロッカーを壁にして区切られていて、指定されたロッカーはドアの

鍵がかからないそうで、穴を開けて大型の南京錠が通してあった。
とりあえず背嚢をベッドの上において一息つく。
荷物を置いたらこの中隊の人事係にいくように支持を受けているが、半日がかりの長旅にはさすがに疲れてしまった。
「いったい俺は、ここでどんな扱いをうけるんだ?」
博人は一人ごちる。
部屋の住人たちは仕事中らしく、この部屋には博人以外に誰もいない。寂しい独り言だった。
しかしそれは、別に自身の状況を悲観してるのではなく、純粋な疑問からでた言葉だった。
大隊付銀輪指導官などという肩書きなので、てっきり大隊本部要員の部屋に入るものだと思っていたのだが、大隊の人事課に着隊の報告をしたところ、一般中隊に案内されてしまったのだ。命令書と話が違うため、大隊の人事が自分をどういう位置づけに置いているのかが見えてこない。
「まあ、考えても始まらんか」
博人はモソモソと背嚢から必要書類を取り出し、中隊事務所を目指して部屋をでた。

大隊本部廠舎と要員の生活廠舎のある地域から、各中隊事務所や懲罰兵廠舎の地域までは、演習場内を自転車で10分走らせた位置にある。
こちらの廠舎は先ほどの廃屋病棟さながらの建物と違い、かなり使いこまれた平屋建てのプレハブ廠舎であった。旧軍時代は演習部隊が天幕を張って宿営していた広場だったようだが、現在では規則正しくプレハブが立ち並んでいる。
『歓迎　第1小隊第3分隊長兼中隊銀輪係兼大隊付銀輪指導官
軍曹　稲葉博人』
あ……そういうこと?
第1中隊事務所である平屋建てのプレハブ廠舎前で、その扉の前

に張られた達筆な歓迎を見て、博人は一人嫌な予感がよぎる。
中隊事務所で着任の必要書類を提出し、事務所勤めの中隊本部要員に簡単に挨拶をすませ、中隊先任上級曹長と作戦・訓練係からの説明をうけて、その予感はいよいよ現実のものとなる。
要するに所属は本部でなく中隊で、中隊から出向する形で大隊本部に赴いて仕事をする、ということだ。すなわち、大隊付銀輪指導官として仕事をこなしつつ、中隊銀輪係としての仕事と分隊長業務を任されるということだ。
（いや、それはあまりにも……）
博人は目の前が暗くなる思いがした。銀輪指導官、銀輪係の任務は、所属部隊の保有する銀輪車の管理と、銀輪機動路の選定やその偵察、訓練・作戦立案においては銀輪特技保有者として速度や予想到達時刻に関して意見を具申し、各部署への調整をすることである。そしてそれは、大隊規模、中隊規模で内容が大きく異なってくるため、両立するのは非常に困難だ。そのうえ、一般中隊の下士官も勤めよというのだから、無茶振りが過ぎる。
「まあ、基本的に銀輪指導を優先させるように大隊本部から指示を受けてるから、分隊のことは副分隊長に任せて、稲葉軍曹は大隊全体への普及教育と訓練指導をよろしく頼む」
「ありがとうございます。そうして頂けるなら、助かります」
しかし、博人が心配した点は、所属中隊としてもよくわかっているらしく、先任上級曹長からは配慮するとの言葉をいただけた。
とはいえ、大して負担が減ったとは思えないのだが。

中隊長への着任申告が終わり、必要手続きをすべて終えると、博人は生活廠舎に引き返した。
「今日のところは、身辺の整理をしなさい」と中隊副官から言われたので、お言葉に甘えることにしたのだ。
廠舎玄関口横の空き部屋に転入者の荷物がまとめてあるらしく、博人は確認するべく向かう。

玄関口では赤坂伍長を見かけた。数人の下士官たちと一緒に背嚢を背負っているのを見ると、あの後駅でお仲間を見つけて、今着隊したところらしい。

向こうはこちらに気づいてないらしく、一緒にいる下士官たちとなにやら話し込んでいる。

博人は部屋に入って自分の荷物を見つけ、部屋の外に出す。ベッド下に入るサイズの衣装ケース2つに、パンパンに膨らんだ大型カバンが2つだ。

博人が生活する部屋は3階にある。

持ち運ぶのは骨だな……と考えていると、何者かが玄関から猛ダッシュで駆け込み、博人の前に急停止した。

息をゼイゼイと切らして膝に手をつき屈みながら、彼は顔を上げた。

「い……稲葉……ハアッ……軍ぞぶ……でずが？」

どうやら、博人に対して本人確認をしてるようだ。

襟に階級章がないところを見ると、下士官ではないようだ。

右袖に縫われた階級章から、彼が兵長であることがわかった。

「そうだけど……君は？」

迷彩服はところどころ汗と砂埃で色が変わっており、時間帯から考えると訓練か何かを抜けてよほど急いできたことが伺える。

「はっ……申じおぐれましだ。ござか……ひゅういじ……」

「おーい。まずは呼吸を整えろ」

息を切らしすぎて全く会話が成り立たない。

「失礼しました」

しばらくすると、ようやく呼吸を落ち着けた兵長は博人に正対し、敬礼した。

「第1小隊第3分隊副分隊長、下士官候補生、小阪　修一　兵長であります。稲葉軍曹、お久しぶりです！」

……え？　こいつ、誰だっけ？

6　銀輪軍曹の着任（後書き）

猛ダッシュで駆け付けた小阪兵長……彼はいったい何者か？　稲葉軍曹との関係は？

7　分隊掌握（前書き）

小阪兵長の話をしようと思いましたが、そのお話はもうちょっと…否、かなり後になりそうです。

7　分隊掌握

「分隊長に対し、敬礼！　直れ！」
小阪兵長の号令に、８人の懲罰兵が一斉に博人に敬礼する。
整然として整った所作には、日々の教練の成果が伺える。

博人が着隊した翌朝、大隊朝礼が行われ、博人ら新任の要員の紹介行事と着任申告が行われた。
その後、博人を待っていたのは、所属中隊における分隊の掌握であった。

中隊廠舎地区そばにある中隊朝礼場では第１小隊先任下士官立会いのもと、博人と小阪兵長、そして博人の分隊員である８人の懲罰兵による分隊としての着任行事が行われていた。他の分隊や他小隊はすでに午前の課業を開始している。
分隊の敬礼を終えると、小阪兵長が一人、博人に敬礼する。
「第３分隊、副分隊長小阪兵長他８名、人員・健康状態異常なし！　集合終わり！」
小阪兵長から報告を受けた博人は分隊員たちを睨み付け、一呼吸ほど間をあけて全員に達する。
「ただいまより、当分隊の指揮を、稲葉軍曹が取る！　分隊長要望事項、『胸を張れ！』　休め」
大なり小なり軍隊では再編成や増強などによって指揮官が変わったり人員が移動すると、指揮系統と指揮官を明確にするためにこうした宣言のようなことをするものだ。
それと同時に、指揮官として隊をどのような隊にしたいか、どう動かしたいか、統率方針や要望を述べることで大まかな方針である“企図”を明示する。
さらに、この企図を説明するため“指導”がはいる。

分隊員を休ませた博人は早速その指導を始めるのだが、内容ははっきり言って新任の挨拶のようなものである。

「懲罰大隊は刑務所ではない。国家の繁栄に寄与できなかったものが、国家のために忠勤するために与えられた場だ。よって、懲罰兵という肩書きに後ろめたさやカッコ悪さを感じる理由はどこにもない。階級を持たない君たちとは立場や待遇が異なることも多々あるが、互いに同じ国勤の士である自覚を持ち、わが分隊では常に胸を張って忠勤することを要望する」

一介の分隊長にしてはえらく壮大な挨拶だが、これには陸軍の人事に対する博人の皮肉がありありと伺える。

（入隊から１０年近く忠勤してんのに、なんで懲罰大隊に来にゃならんのだ、畜生！）

同時に、懲罰兵に対する同情もあった。

一般に、懲罰兵は“負け組み”の典型といわれる。

軍籍にありながら階級がなく、その身分は二等兵にも劣る。４年間の任期のあいだ最低限の衣食住は保障されるだけで給与はなく、除隊後にある程度の退役賞与が与えられるくらいだ。その後の人生については、保有する特技・資格やコネクションに恵まれない限り、国営の農場で農夫になるか、国が斡旋する仕事に就いて少ない収入で細々と老後を迎えるしかない。

容姿や環境、才能や経済力、性格や人間性、社交性といったものに恵まれようと恵まれまいと、結婚できるできないは全然わからない未知の領域だ。それを２７歳までと時期を決められて、博人と違っておそらくここにいる男たちはそれなりに結婚する努力はしてきたはずだし、可能な限り妥協も譲歩もしてきたはずだろう。ただ縁がなかったというだけで、こんな所に墜ちついてしまうなど不運極まりない。

せめて在役中に何かしら特技・資格を得るか、どうにかして再就職に有利な功績を得られればいいのだが……。

そんなことを考えながら、博人は指導を終えると、事後の指揮を

小阪兵長に委任して“中佐”の待つ本部廠舎に向かうのだった。

7　分隊掌握（後書き）

しばらくは、稲葉軍曹視点による懲罰大隊の説明になりそうです。
さて、次回は久々に中佐殿の登場です。

8　懲罰大隊　作戦・訓練課（前書き）

中佐の出番、少ないです。

8　懲罰大隊　作戦・訓練課

懲罰大隊はいかに運用されるのか？

一昔前、少なくとも博人がまだ中学生の頃は、陸軍の“捨て駒”であった。

蛸壺を掘って地雷や爆薬を背負い、旧式小銃と擲弾筒を装備して待ち構え、与えられた持ち場を最後の一兵になるまで死守する。そうすることで時間を稼ぎ、防御戦闘や遅滞戦闘、撤退戦などで陸軍主力の作戦を援護するのだ。

こうした運用がなされたのは、少子化抑止のための独身者に対する脅しでもあったが、創設そのものが急であったことと予算不足が起因していた。

本来であれば陸軍の一般部隊と同じように調練して、危険度の高い第一線や被災地において運用するはずだったが、残念ながら時間も予算も装備も足りないうえに環境が整わず、固定された銃座に調練するだけで精一杯だった。

そんな時代から月日は流れ、代を重ねるごとに経験は蓄積され、環境は整理され、予算が整うにつれて装備は充足し、それに伴い戦術や技術は継承され、近年になってようやく“捨て駒”は“鉄砲玉”に変わり、そして現在、“鉄砲玉”は“尖兵”に変わりつつあった。

大隊朝礼、分隊掌握、そして本日の仕事場である本部に戻ってと、本部と中隊を行き来するのは結構面倒臭い。

大隊本部廠舎の作戦・訓練課に、大隊付銀輪指導官である博人の机はあった。

基本的に大隊本部は、４つの課で構成されている。

人事作業や文書を取り扱う人事課、情報収集や情報保全を行う情報課、作戦・訓練立案を担当する作戦・訓練課、補給等の兵站業務

をおこなう兵站課だ。
　そんななかでも作戦・訓練課は、人事や情報、兵站の状況を掌握し、大隊長の企図や統率方針に基づいて作戦と訓練を立案する部署であり、「参謀課」などと呼ばれることもあり、実際どこの部隊でも課長は“参謀長”を自称している。
　とりあえず自分の机について一息ついた博人だったが、課長が机にいることに気づいてすぐに席を立った。
　昨日、着隊してすぐに作戦・訓練課にも挨拶に伺ったのだが、そのときは不在だったのだ。今朝の大隊朝礼でも業務かなにかのために参列していなかったので、博人としてはやっと挨拶の機会が得られた。
　作戦・訓練課長である秋山　義男　陸軍少佐は、博人が下士官候補生時代に下士官学校歩兵科教育中隊で教鞭を振るっていた元教官であり、軍曹昇進してすぐの中級下士官集合教育でもお世話になったうえに、原隊復帰後には博人の希望を何処で聞きつけたのか知らないが陸軍大学の研究室に推薦状を書いてくれた恩師である。
　背が低く（おそらく１６０ｃｍ弱）小太りな外見をしているが、軍服の下には一切の贅肉のない怪力太マッチョで、鋭い眼光に謎の火傷と傷跡が残る顔がとにかくおっかない将校だ。年齢はたしか……今年で５２歳のはずだ。
「お久しぶりです、秋山教官……じゃなくて秋山参謀長殿」
　博人が声をかけると、秋山少佐は先ほどまで睨んでいたパソコンの画面から目だけをギョロリと動かして今度は博人を睨んだ。
（怖！）
　その眼光があまりにも怖すぎて博人は一瞬だけたじろぐ。
　秋山少佐は博人を確認すると、椅子に座ったまま一度背伸びをして、背もたれにもたれて博人に顔を向けた。
「おー、久しぶり。研究室ではよく頑張ってたらしいね。熱心な研修生が来てくれて良かったって、あちらの研究室長からお礼状までいただいたよ。それと、課題の論文も読ませてもらったよ。いや、

あそこまでやってくれたら、推薦した甲斐もあったってもんだ」
「恐縮です」
褒めてくれているのは言葉の節々からわかるのだが、目が怖い。睨みつけられているようで、指導を受けてるような気がして、博人は“恐くて縮む”ような思いがした。
「教え子がこうして部下になるのを経験するのは初めてではないが……なんというか、感慨深いものがあるなぁ」
しみじみと語っているが、顔が恐い。怒っているわけでもないのに、なんだこの威圧感。
もうこのくらいにして机に戻ろうと、博人は口を開く。
「本部勤めは初めてで何かと至らぬ点もあるかと思いますが、ご指導ご鞭撻のほど、どうかよろしくおねがいします」
「ご指導ご鞭撻？　教えられることは全部教えたつもりだがな……。よろしい、忘れているように見受けたら遠慮なく鉄拳をやろう」
多分冗談で言ってるんだろうけど、そんなギョロ目で睨みながらニッと口角を吊り上げられると、今すぐなんかされそうで恐い。
博人が背中に嫌な汗が流れるのを感じていると、秋山少佐はふと思い出したように机の引き出しに手を伸ばし、１冊のファイルを取り出した。
「ああ、そうそう。これが今年度の大隊の大まかな隊計（隊務運行計画）の写しだ。昼には副大隊長からも明示されるけど、もう持っておいて、覚えておいてくれ。今年は何かと忙しいぞ」
「了解しました」
博人はファイルを受け取ると、そそくさと自分の机に戻ったのだった。
「敬礼！」

突然、室内に響き渡った声に、博人はすぐに椅子から立ち上がり、作戦・訓練課事務室の出入り口を確認する。

見覚えのある将校がいるのを認めて、博人を含めて室内の全ての者がすぐに姿勢を正し、敬礼した。

入ってきたのは、懲罰大隊の副大隊長であり、半月前博人が前所属部隊の駐屯地で出会ったあの中佐であった。

原田　貞夫　陸軍中佐は、元々近衛師団本部の作戦・訓練部に所属していたが、昨年この第2懲罰大隊の副大隊長に着任した。小阪兵長によれば、下士官からの叩き上げで佐官まで昇進した経歴を持つ大ベテラン……らしい。

（うーん……たしかにそんな貫禄あるわ。映画で見た……乃木大将そっくりだ）

中佐の答礼を確認して、博人たちはまた元の業務に戻る。規則上、執務中の事務室等においては、敬礼が終われば室内の先任者か特に示された者が応じ、それ以外は通常業務に従事することになっている。

秋山少佐から渡された隊計に目を通していた博人だったが、

「稲葉軍曹。ちょっといいかな？」

課長の机の方から声が聞こえてそちらに目をやると、副大隊長が手招きしている。

「あ、はい」

え？　なに？

手招きに応じて原田中佐のもとに向かうと、中佐はいきなり熊が敵を威嚇するかのように両手をあげると、それを一気に博人の肩に振り下ろした。

「いやー、改めてよく来てくれたね。不便な思いをさせてしまうだろうが、君には期待しているんだ。よろしくたのむよ、大隊付銀輪指導官」

「はっ、はいっ。恐縮です」

原田中佐は博人の両肩をバシバシ叩きながら、歓迎してくれたのだが……秋山少佐の豪腕と違い、枯れ木のように痩せこけた中佐の細腕と掌からくる衝撃は竹刀で打たれているかのように地味に痛い。

頼むよ。期待しているよ。頑張ってくれよ。…と散々激励をして、原田中佐は事務室を出て行った。

中佐の去った室内でしばらく呆然としていた博人は首を傾げつつ、秋山少佐の方を向いた。

「あの……副大隊長殿は、何しにきたんですか？」

博人の問いに、秋山少佐は手元の資料に目を通しながら答えた。

「あれな……今回の人事でこの部隊にきた奴一人ひとりに、副長はああして挨拶回りしてるんだよ。今回の懲罰大隊の要員の人事、ほとんどあの人の一存だ。推薦したのは別だが、召集したのは自分だから後ろめたさがあるんだろうなぁ」

秋山少佐によると、原田中佐は懲罰大隊に着任してから懲罰兵が程度の低い訓練を受けていることに不満を感じていたそうだ。

装備が改善され、訓練環境が整っても、指導する要員のレベルが低く、無駄に厳しいだけで身のある訓練ができず、“捨て駒”や“鉄砲玉”運用から抜け出せる状態ではなかった。

「まあ、その点は俺も問題視してたんだけどな。懲罰部隊なんて、有事の際には危険な場所に配備するもんなのに、その危険度に見合った能力がなかったら話にならん」

そこで、原田中佐は自分のもつあらゆるコネを利用して、人材集めに奔走した。

「あの人、士官学校や下士官学校で教官職についた経歴もあってな、教え子の中には将官まで出世したのもいるそうだ。で、まあ、俺や他の課長が思いつく人材を選抜して、副長がかけあい、こうしてお前も含めた人材の招集ができたわけだ」

要するに、より実戦的な部隊へと改変するべく原田中佐は奔走していたのだ。

秋山少佐の話に博人は感心しつつも、ふと気がついた。

「あれ？　……私を推薦したのって、もしかして参謀長ですか？」
「ああ、そうだ。銀輪指導官どうするって話になったとき、お前が研究室に研修を希望してるって他の教え子づてに聞いてな。大隊付銀輪指導官なんて大層な職務には軍曹では階級がちょっとあれだったが、上級銀輪資格もあるし、特別研修生の経験を積ませれば箔がついていいと思ってな。だから推薦状書いてやった。しかも独身だから、陸軍独身者への見せしめにもなるし」
（そんな早い段階から、俺の人事は決まってたのかよ）
秋山少佐の話に、博人は深いため息をついたのだった。

8　懲罰大隊　作戦・訓練課（後書き）

なんか稲葉軍曹が平凡な陸軍下士官ではない気がしてきた。
かなり有能な下士官みたいに見える……。

次回はいつになるだろうか？　来週末は忙しいから無理だろうな。

9　大隊隊計（前書き）

短いですが、とりあえず更新します。

9　大隊隊計

『複立２１年度懲罰大隊隊計』

１／四半期（４～６月）

○懲罰新兵受け入れ、教育開始……教育隊銀輪指導官の教授計画指導

○７７式歩兵銀輪車導入……配備予定の第一中隊、および各中隊下士官以上に新装備普及教育の実施

２／四半期（７～９月）

○陸軍第２懲罰大隊（第一中隊、砲兵中隊）・海軍第５陸戦隊合同訓練……訓練地域銀輪機動路偵察

３／四半期（１０～１２月）

○第２懲罰大隊検閲（長距離機動訓練）……各中隊の行進経路の選定

○勤労農村農業支援（混成１コ中隊）……農村地域への往復経路選定および偵察

４／四半期（１～３月）

特になし

全般

○各中隊訓練における銀輪機動訓練計画の細部指導

○駐屯地域周辺および各種訓練地域の機動を前提とした地誌調査

「まあ、ざっとこんなものか……」

大隊隊計明示を受け、博人は特に自分にかかわる訓練と自分の役割を大まかにリストアップし、グッと背伸びをして息をついた。

とりあえず当面の仕事は、７７式の導入に伴う普及教育になるだろう。自分の所属中隊が大きくかかわっているうえに、大隊の下士官以上がすべて対象となっている。教授計画を作るのは大変だな。

新兵教育も含めて各中隊の訓練計画指導については、それぞれの指導官が計画もってきてからでいいだろう。内容について細部意見していくだけでいい。

残るは地誌調査だが……これはどちらかといえば情報課の仕事だと思う。まあ、実際に道路を走って見なければわからないこともあるわけで、そこを実際に走って偵察するのが銀輪指導官だ。有益な情報をあげられるように頑張ろう。

それにしても、陸軍最新鋭装備である７７式歩兵銀輪車がもう配備されることには驚いた。量産が始まったのは知っていたが、こんなに早く、ましてや旧式装備を回されがちな懲罰大隊に１コ中隊分が配備されるとは思っても見なかった。副大隊長のコネもあるんだろうなぁ。

「とはいえ、俺、試作機しか乗ったことないんだよな。後で研究室に問い合わせて、参考資料送ってもらうか。……って、参考資料っていえば、俺この演習場や周辺地域の資料も不足してるよな」

昨日着隊したばかりで当然なのだが、博人にはこの周辺の土地勘がほとんどない。地域はおろか、駐屯している演習場の細部地形には詳しくない。今後、各中隊の指導をするうえでこれは必要な情報だ。

それどころか、この部隊の銀輪車の保有状況や管理状況についてもまだ掌握しきれていない。

一応、前任者の訓練指導簿や管理簿をみたが、情報だけで現物の確認はまだできていない。

午後の課業時間はまだ残っている。

（とりあえず、各課と各中隊、各部署に直接確認取るところから始めるか）

博人は椅子から立ち上がると、作戦・訓練課事務室をあとにしたのだった。

9　大隊隊計（後書き）

次回より、稲葉軍曹が大隊付銀輪指導官の本領発揮！？

……過度な期待は禁物です。

１０　課業終了（前書き）

銀輪軍曹の本領発揮……の前に、一休み。

明日を迎える前に、まずは夕飯と入浴、そして就寝とあいなるわけですが……。

懲罰大隊は課業外も過酷です。

１０　課業終了

「気を付け！」

ラッパの伴奏が聞こえた瞬間、秋山少佐は事務室内に響き渡る声で号令を発した。

現在時刻、１７００時。一日の課業終了を伝える、ラッパの音による国歌が本部廠舎地区に響き渡る。

室内の全員がそれぞれの作業を一時止めて、国旗のある方角に向けて正対し、不動の姿勢をとる。

もしこれが国旗の確認できる場所であれば国旗に対して敬礼や捧げ銃などの礼をとるが、屋内からでは国旗掲揚塔は見えない。この場合はその方角に向けて正対し、不動の姿勢をとる形の礼をとることになっている。

しばらくすると国歌が鳴り終わった。

博人は自分の机の椅子に腰を落とし、はぁ～と長いため息を吐いた。

目の前の机の上には、情報課や兵站課から取り寄せた各種資料が積み重なっている。

演習場や駐屯地域周辺の地図、駐屯地域近隣について記述された兵要地誌、７７式歩兵銀輪車配備に伴う兵站計画書の写しや、現在部隊に配備されている５３式及び６２式歩兵銀輪車の数や整備状況表、さらに過去の大隊訓練（特に長距離銀輪機動を伴う訓練）の記録まで集めた。

各中隊からは長距離の銀輪機動を伴う訓練・演習の大まかな予定が、各中隊の銀輪係や伝令から届けられた。

あと必要な資料といえば、陸軍研究室の発行する７７式歩兵銀輪車の取扱説明書や訓練参考資料だが、問い合わせたところ近日中に基地回線によるメールで送付されるという。

初日の仕事は、こうした資料の収集と仕分けで終わった。

まだ目を通していない資料も多く、今日はもう少し残業しようと考えた博人だが、とりあえず夕食をとることにした。

「課長に対し、敬礼！　直れ」

「ご苦労さん！」

「「お疲れ様でした！」」

夕食時間を知らせるラッパがなる頃、事務室内で簡単な終礼を終えて、博人は作戦・訓練課の要員たちと事務室を出て食堂に向かうのだった。

「ゲッ」

夕食のメニューの中央の大皿に盛られた魚のフライを見て、博人は思わず顔をしかめた。

この大きさと形、多分間違いない。

大昔、食糧危機を救う可能性を秘めて海外からやってきたとある淡水魚。

圧倒的な繁殖力と環境適応能力を兼ね備え、国内の湖や池の生態系をぶち壊しながら増え続けたものの、食用に適した大きさに育つには時間がかかりすぎる上に、食生活における淡水魚離れや見た目の悪さからそのままでは食卓には上がらなかったそれが、現代では積極的な外来種駆除を目的に捕獲し、食糧危機を契機に普通に食さるようになった。

確かに身は淡白で上品な味わいで、“上手に調理さえしてやれば”泥臭さも生臭さもなく美味しくいただけるが、骨が硬くて丸ごと食べるのは難しい。

案の定、口に入れた瞬間、かすかな泥臭さが気になった。

衣にカレー粉を混ぜ、ソースをかけるなどして誤魔化しているが、美味しいといえるものではない。

ちゃんと皮を剥いてから揚げているところを見ると、食用に育てられた養殖ではなく安い天然物のようだ。

なぜ天然物が安いのか？
外来種駆除のために、池や湖の管理を管轄している市町村が釣り人から回収しているからである。

『本日の夕食
ブルーギルのカレーフライ
・
・
・
』

博人も子供の頃はよく近所の池で釣って帰り夕飯の足しにしていたが、手に着いた臭いが取れなくなるとかいいながら捌いていた母親が嫌な顔をしていたのを思い出す。自分でも調理していたが、ある日皮の下に寄生虫が蠢いているのを見てから食べたくなくなってしまった。
隣に座った伍長に聞くと、週に3回はメニューで出てくるらしい。
……最悪だ。

演習場の外周には、清流が流れている。
その一部は演習場内にも流れており、その各所に周囲の草木を刈り取って整地された川原があった。
今夜は天候と月齢にも恵まれて夜空は十分に明るいが、川原では篝火が焚かれ、炎が川原をさらに明るく照らしている。
ジャージ姿でそんな川原の1つに下りた博人は、同じくジャージ姿で案内のために隣にいる小阪兵長に恐る恐る問うた。
「マジか？」
「はい。マジです」
小阪兵長が即答し、博人はため息をつきながら目の前の光景を見

た。

春になったとはいえ、夜の水の冷たい清流で水浴びをする男たちの姿がそこにあった。

懲罰大隊の風呂は小さい。そして廠舎にシャワーなどという気の利いたものはない。

はっきり言って懲罰兵及び各要員が毎日風呂に入るのは不可能である。

そのため、将校を除いて各中隊は日替わりで風呂に入り、入れない中隊の人員については川で水浴びをするのがこの懲罰大隊の“入浴”であった。

昨夜はたまたま所属中隊の入浴指定日だったからよかったものの、本日はこのざまである。

ジャージを脱ぎ、指定された場所に命札（入水中を示す名前を書いた板切れ）を置いた博人は、小阪兵長とともにガチガチと歯を鳴らしながら川に入っていった。

膝までつかる所まで歩いて、ゆっくりと腰を下ろす。

「「ギャーッ！！」」

あちらこちらから、川原一帯に悲鳴が轟く。

水温１６度と、川原に備え付けの温度計が示していた。

しばらく水を浴びて、博人は小阪兵長とともに篝火の傍まで行くと、小阪兵長は歯を鳴らしながら説明してくれた。

「入水自体はいつでも自由ですけど、１７３０から２０３０までしか篝火の係がいないので、それ以外の時間、特に夜は絶対に１人では入らないでください。あと、命札は絶対携行してください。それと……あそこに張られたロープより先はかなり深いです。あと、向こうには滝があるので滝打たれとかできますよ。」

タオルで体を拭きながら、博人は当然の疑問を口にした。
「なあ、これ……冬とかどうすんの？」
さすがに冬に清流で水浴びなんて洒落にならん。死人が出る。ただでさえ川ってだけで危険なのに。
「各人に洗面器一杯ずつお湯が頂けるので、それで体を拭くくらいですね」
……最悪だ。
ケロリと答える小阪兵長に、博人はがっくりと肩を落とした。
前の駐屯地であれば営内居住者全員が入れるだけの浴場があった。入浴時間外でも、水しか出ないがシャワーがあった。
ちなみに一般家庭では、地域によってことなるが大概その町の銭湯に通う。アパートなどでは共用のお風呂なんかもある。個人で風呂を持つものもいるが、ガスは貴重であるし熱エネルギーは電力消費が激しいために、よほど裕福な家でなければありえない。薪で沸かすお風呂もあるが、個人の家単位ではあまり見かけるものではない。
そんな当たり前が、この懲罰大隊にはない。
（俺……ここでうまくやっていけるだろうか？）
これから先が思いやられると、不安に押しつぶされそうになりながら、博人はもとのジャージに着替えるのだった。

１０　課業終了（後書き）

外来種生物を食べよう！　釣り人が積極的に捕獲して食用にもっと研究すれば、湖や河川の生態系は持ち直す……と思う。

各家庭で入浴するより、温泉を利用したり、町村規模で一箇所の大浴場を利用したほうが光熱費がかからない……はず。いい地域交流にもなると思う。

11　銀輪軍曹の訓練指導（前書き）

稲葉軍曹、指導官としての本領発揮。

１１　銀輪軍曹の訓練指導

「こんなつまらん指導させといて、その態度はなんなんですか！？ふざけんなよ！！」

午後の課業開始から間もなくして、第２懲罰大隊第３中隊事務室に博人の怒声が轟いた。

博人は第３中隊の銀輪係である自分よりも１０コ以上も年上であろう軍曹に向かって、彼が書いた訓練計画書の一部であり銀輪機動経路図と時間計画表をぶちまけた。

相手は自分より年配で大先輩であるし、それなりに言葉を選んで穏便に間違いを指摘し、それなりに反省してくれれば良いと思っていた。

しかし、この軍曹はまったく反省の色など見せず、博人を舐めてかかっていた。

ことの発端は、午前の課業が始まったときのことであった。

懲罰大隊の銀輪指導官に着任して数日が経過し、博人はようやく職場になれ始めていた。

懲罰新兵も着隊し、教育隊の銀輪係からの教授計画のチェックも先ほど終わった。

各種資料は揃い、７７式歩兵銀輪車の普及教育に向けての教授計画も決済が下り、ようやく一息つけると思っていた矢先のことである。

「稲葉軍曹、ちょっといいかな？」

作戦・訓練課事務室の出入り口を見ると、兵站課の相良　哲平陸軍曹長が立っていた。

それなりに年配で、線は細く痩せこけているが１９０ｃｍをゆうに超える巨人で、丸坊主の白髪頭が特徴的な曹長だ。

相良曹長は鉄道隊からの派遣隊員で、兵站課において懲罰大体の作戦・訓練における鉄道輸送の調整を行っている。

陸軍が鉄道輸送をする場合には、おおよそに分けて2種類の方法がとられる。

1つは現行のダイヤのままに、作戦・訓練時間に合わせた電車に軍用の増加車両をつなげて輸送する方法だ。通常の時刻表どおり電車が運行されるので、民間人の移動に支障が出ない。通常の訓練ではよく使う方法だ。

もう1つは、軍用車両単体を運行することだが、通常ダイヤが臨時ダイヤに切り替わることによって鉄道を利用する民間人の移動に支障をきたすという欠点がある。大隊規模の訓練か災害などの有事でもない限り、まず使われることの無い方法だ。

相良曹長の仕事は大隊の作戦・訓練の計画にのっとり、これら2つの中から適した手段を選択し、時刻表や路線図について各駅や各路線の鉄道隊本部と調整を行うことだ。

博人も輪行を伴う機動訓練を考える際には、地図や路線図、時刻表とよくにらめっこするために、相良曹長には増加車両調整や路線状況についての助言を戴いたりと着任初日からかなりお世話になっている。

普段は博人の方から兵站課に赴くところだが、この日は珍しく相良曹長が作戦・訓練課を訪れていた。

相良曹長は博人の机まで来ると、ある訓練計画書の地図と時間計画を机の上に広げた。

「これさあ、今回第3中隊からきた訓練計画なんだけど……俺は自転車は専門外だからあれなんだけど、この駅で降りてこの駅まで、この経路で機動して時間通りにこれそうか？」

相良曹長の言葉に、博人は訓練計画書の地図を睨んだ。

「え？　3中隊……これ、本気か？」

思わずそうこぼすほどに、はっきり言ってずさんな機動計画であった。

銀輪機動による行進訓練に、途中で鉄道機動を盛り込むことはよくある。鉄道は陸軍の兵員輸送の基軸ともいうべきものだから、戦地まで最初から銀輪機動などありえない。問題なのは、鉄道は時間とおりに運行されるものであり、駅への到着が遅れることなどあってはならないので、行進計画の作成の際には地図や路線図、時刻表とのにらみ合いに始まり、さらに現地の地形や当日の天候や風向きも検討して、精査に精査を重ねて計画を練らなければならない。

しかし、今回の第３中隊の行進計画はとんでも無いものであった。博人は机の引き出しからこの地域の兵要地誌を取り出し、地形気象に関するページを開く。さらに、個人で所有する道路地図や情報課からより寄せた天気予報を見て、博人は顔が引きつっていくのを感じた。

「百歩譲ってこれが強行軍にしたって、無茶苦茶だ。この山道の所でこの速度は出ないし、この経路だとここの農道では緊急搬送時の馬車が入れない。うわっ……ここことか風向きに逆らいまくってるのに時速２０ｋｍ？　時速１０ｋｍでも危ういぞ。これじゃ、駅到着が少なく見積もっても２時間は遅れるんじゃ……？　いやいや……この武装でこの速度はちょっと……」

道路地図の平面距離と銀輪車の緒元上の速度（それも軽装の場合）だけしか見ないで計画を作っていることがアリアリと伺えた。

くどいようだが鉄道機動を伴う行進計画は、十二分な計算と予測が必要で、経路上の地理や天候、風向・風速、時刻表や路線の状況、兵員の武装や練度から出せる巡航速度や最高速度、そうしたものを確実に把握した上で、非常時の腹案や経路変更や安全管理計画まで精査に精査を重ねて練る必要がある。部隊の駅到着が遅れれば作戦や訓練そのものが破綻するし、最悪鉄道ダイヤに多大な影響を及ぼすことになる。

一応、非常時の腹案として短縮コースの設定もされているが、これでは走行開始早々にそれを実行することになるだろう。はっきり言ってこの訓練計画は破綻している。

博人が顔を引きつらせている横で相良曹長はやっぱりな……と言わんばかりに大きなため息をついていた。

「俺、この経路について土地勘は無いですけど、断言できます。これ無理ですわ」

「あー、やっぱりそうか。うん、なんとなくわかっちゃいたけどね……俺もこの地域の路線についてはいくらでもいえるんだけど、道路状況についちゃ俺も土地勘ないし、自転車の移動能力でどうかってのもよくわからんから、鉄道隊員としてこの計画にあんまり意見できないんだよな。向こうの銀輪係がそれで間に合うって断言すると、どう追及していいかもわからんし」

そんなことを話していると、第3中隊の伝令が相良曹長が持っているのと同じ訓練計画書を持って作戦・訓練課にやってきた。秋山少佐の決済をもらいにきたのだろう。

中隊規模の訓練なら、とくに作戦・訓練課の決済はいらないが、駐屯施設外での訓練と鉄道機動が絡むために本部各課の決済が必要なのだ。

課長席にいながら博人と相良曹長の会話を聞いていた秋山少佐は、すぐに博人を机まで呼びつけ、博人は伝令から計画書をひったくった。

そうこうしているうちに、秋山少佐は内線電話で第3中隊に電話をかけて、向こうの銀輪係を呼び、博人に受話器を渡した。

伝令の上等兵が何事かとオロオロしているなか、博人は訓練計画書の行進計画における不備をコンコンと第3中隊銀輪係に指導したのであった。

それから数時間後、昼休みの始まる数分前くらいに手直しされた訓練計画書が伝令によって届けられた。

あのあと、秋山少佐は課内であの訓練計画書のチェックを行わせたが、行進計画以外の点では不備は見つからなかった。

博人は手直しされた行進計画を再度チェックする。

じっくりと目を通し、気づけば昼食時間を知らせるラッパが鳴っていた。
「どうだ？」
秋山少佐がおもむろに博人に問う。
「駄目です。この銀輪係、銀輪特技認定を本当に受けてるのか疑問です」
博人は伝令に計画書を叩き返し、呆れたとばかりに大きなため息をついた。
「よし、稲葉軍曹、午後から3中隊に行って直接指導してこい。向こうの中隊長には俺から一言言っておく」
「了解」

向こうにしてみれば、生意気な若造に見えたことだろう。階級は同じであるが、軍歴で見れば彼は大先輩のはずだ。
大隊付銀輪指導官なんて大した肩書きだが、所詮は参謀長の威を借る若手軍曹。
おそらくそう見られたに違いない。
そういう観点で考えれば、大隊付の銀輪指導官に任命するなら本人の特技・資格や経歴を考慮しつつも、階級や年功序列も考慮して曹長以上か勤続年数の長い年配の軍曹を配置したほうが有無を言わせず指導ができていいものだ。
懲罰大隊での勤務経験でも、向こうが先輩だし、それなりに訓練地域に土地勘があるのかもしれない。
だが、向こうの不備を見つけた以上、彼のその自負や自身、プライドや土地勘があるという妄想を、理論と数字と事例、確かな根拠で粉砕する必要があった。
とはいったものの……指揮系統上、というよりは指導官であるため序列では博人のほうがこの軍曹よりは上位に位置するが、先輩に対して最低限の礼儀はわきまえるべき……という倫理観からくるジ

レンマが博人を悩ませる。
博人はまず、訓練時の兵員の武装状況から考える巡航速度と最高速度の計算から説明し、さらに経路上の特性を兵要地誌や市役所から取り寄せた道路状況図等を用いて説明し、風向・風速の観点から出せる理論値を懇切丁寧に説明した。
「以上の観点から、この行進計画は破綻しています。さらに、安全管理上の観点から見ても、非常時搬送用の馬車の手配ができていません」
しかし向こうはまったく自分の非を認めるつもりがなかった。
「稲葉軍曹は現地の土地勘が無いからそう言えるんです。この計画で問題ありません。大した計算と見積もりによるご指摘ですが……」
「では、山口軍曹は現地の経路偵察を行われたのですね？　その偵察結果資料が行進計画にまったくありませんが、どういうことでしょうか？　情報課の兵要地誌にはない、地形や気象の特性が発見されたともいえますよね？」
「いや、それは、その……。だが、いざとなれば短縮ルートで間に合わせることもできるんだし、こちらのルートなら問題ないんだろう？」
「それでは第3中隊の訓練そのものが破綻したことになりますが、いいんですか？」
「今回のこの訓練は防御訓練が主体であって、行進後の築城や戦闘がメインなんだ。その前の行進については重視されていないだろ？　これは中隊の訓練であって、中隊長の決済はすでにおりているし、主たる訓練が可能なら問題ないだろ？」
このクソジジイ、本気で言ってるのか？
たしかに、この中隊の訓練計画書によれば防御訓練が主たる訓練である。鉄道機動と銀輪機動をしたのち、この演習場において防御戦闘訓練をすることになっている。
だが、この訓練は行進から始まる以上、行進計画には第3中隊長の訓練方針も示されていて、この訓練経路もそれに基づいて計画さ

れているはずだ。主たる訓練ができればいいだろうなどと、上官を舐めているとしか思えない。

しかも、短縮コースをとった場合、予定の駅までの到着が3時間近く早まることが予想され、駅前での混雑が起きる可能性もある。それを避けるために速度を落とした場合、経路上において一般の自転車や馬車が道路渋滞を起こす可能性も考えられる。そうした事態を考慮しても、やむ得ず使用するのが非常時の短縮コースのはずなのだ。

博人がその点を指摘すると、この銀輪係・山口軍曹は舌打ちして、

「あー、よくわかりました。今日中に書き直します、大隊付銀輪指導官殿」

渋々といった様子で机についた。

やれやれ……とりあえず反省の色は薄いが、なんとかなったか。

博人は長い安堵のため息をついたが、ふと計画書の作り直しをしている山口軍曹の机を見てその顔が凍りついた。

計画作成をしている山口軍曹の机には地図と時刻表しかなく、使い古された過去の訓練計画書のコピーがおいてあり、他の資料が見当たらない。明らかに過去から使い古された計画書を写して、計画作成をしていることがわかる。

博人の場合、前の所属部隊でも机の上には膨大な量の地図やら路線図、地誌調査結果や気象情報誌が積み上げられていて、常にそれと睨めっこしながら、指揮官から示された方針に応じて経路選定をやってきた。少なくとも博人が知る限りでは、銀輪係や指導官ならそうやって計画を作成していくのが当たり前であった。

しかし、山口軍曹はそうした過程を一切なしに、つまりは計画を自分で作るということを放棄していた。

目の前のこの光景は博人にとって信じられないものであった。

「ふざけんなよ、てめえー!!」

気づいたときには、博人の拳は先輩軍曹の鼻っ柱を打ち抜いていた。

１１　銀輪軍曹の訓練指導（後書き）

稲葉軍曹がキレた！！？
作者としては、温厚なキャラクターにしたかったところでしたが、１１話にしてキレました。
山口軍曹は果たして無事なのか？
そして、相良曹長は今後もよく登場しそうです。

１２　指導と暴力と反省と謝罪（前書き）

暴力事案のその後です。

12　指導と暴力と反省と謝罪

うわぁ……やっちまったぜ。
本気で人を殴ったのはいつ以来だろう？
ていうか、自分より年配者を殴ったのは初めてではないだろうか？

あの後、博人は殴り飛ばして椅子ごと床に転がった山口軍曹に怒鳴りまくった後、さらに追撃の蹴りを加えようとしたところで第３中隊の他の要員たちに取り押さえられた。
その後、博人は騒ぎを聞きつけた秋山少佐によって保護され、作戦・訓練課事務室で平手打ち１発を頂戴して小一時間絞られるはめになった。
「気持ちはわかるがやり過ぎだ。まさかお前があそこまでキレる奴だとはな……」
「申し訳ありません」
本来なら数日間の停職処分を受けるところだが、幸いなことにこの一件は秋山少佐と第３中隊長による協議の結果、“指導官の正当な理由によるやや行き過ぎた指導”として片づけられ、秋山少佐直々に厳重注意を行うことで収められた。
軍隊の指導においてある程度の暴力や体罰は認められているが、それでも段階を踏んで行う必要がある。博人の場合、山口軍曹の職務怠慢に対しての指導という正当な理由があったが、まずは暴力に訴える前にその現場を見咎めたその時に口頭で注意する必要があった。
博人は後で知ったことだが、山口軍曹は初級銀輪の特技資格はあったものの、その認定は１０年も前で銀輪係の職務経験も殆どなかったとのことだった。
しかし、それにしたって博人にしてみれば許しがたいことであった。

前の隊では情報課の他に役所や地元協力団体まで巡って資料収集に奔走し、時には現地を数日間めぐって経路や周辺地理の調査まで行い、鉄道隊に細部調整して、ようやく行進計画の決済を得ていた博人にしてみれば、過去の訓練記録と道路地図で机の上だけで計画しているその姿は、自身が数年間してきた仕事の熱意をすべて否定されているに等しいものであった。

そして、そうした博人の怒りを秋山少佐もちゃんと理解していたのだった。

「まあ、やっちまったもんはしかたない。暴力をふるったことについて“のみ”、後で山口軍曹に謝っておきなさい」

「了解しました」

課業後、夕食を終えた博人は生活廠舎には戻らず作戦・訓練課の自分の机についていた。

第3中隊に続いて、課業終了少し前に第2中隊からも行進訓練計画が提出されたため、博人はそのチェックをしていたのだ。

一通り行進の距離と時間計画について点検していた博人だったが、ため息交じりに計画書を机の上において椅子の背もたれに体重を預けた。

「うん。まあこれだったら……問題ないかな？」

第3中隊のように、計画の不備が見つかったのではない。ため息は安堵から出たものだ。

兵員の武装や練度、地図や地誌、気象情報に基づいてきちんと計算された計画であり、きちんと理論と数字に裏打ちされた時間計画が練られている。非常時の腹案もしっかりと考えられており、まったく問題はない……と思う。

この計画を書いた銀輪係はこの訓練地域について土地勘が十分あるらしく、内線電話で問い合わせたところ自信たっぷりにこちらの問いに答えてくれた。

（とはいったものの……やはりこちらもちゃんと土地勘を持つか、独自の情報源から追及する術がないと、指導官としての仕事ができないな。役所の他にも、地誌について詳しい情報源を得る必要がありそうだ……）

そんなことを考えながら博人は計画書の表紙に付箋紙を張り、「問題なし」と記して課長の机にそれを置くと、事務室の戸締りを始めた。

「稲葉軍曹、よろしいですか？」

自分の机の片づけを始めたとき、事務室の出入り口から聞き覚えのある声がした。

そこには、鼻の上に大きなガーゼを紙絆創膏で固定した、痛々しい姿の山口軍曹が立っていた。その後ろには、第３中隊の先任上級曹長の姿もあった。

山口軍曹は博人の姿を確認すると、深々と頭を下げた。

「この度は、本当に申し訳ありませんでした」

博人もあわてて、頭を下げる。謝らねばならないのは、こちらも同様だ。

「いえいえ、こちらこそ、ついカッとなってしまいまして、すいませんでした。……その、鼻は大丈夫ですか？」

山口軍曹は頭を上げると、

「少し痛みますが、問題ありません。いやはや、真正面から殴られたのは久しぶりです」

苦笑交じりにそう言いながら、博人の机の上を見た。

「すごい資料ですね。以後、職務に怠慢なきよう気を付けてまいりますので、稲葉軍曹には引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

２人は相互に敬礼をして、この一件は本当の意味で収まったのであった。

12　指導と暴力と反省と謝罪（後書き）

この話、書くか否か迷ったのですが……暴力振るったまんまってのも後味悪いのでとりあえず書きました。

１３　副分隊長（前書き）

小阪兵長のお話……というよりは、副官の仕事紹介？

１３　副分隊長

博人はまったく覚えていないのだが、小坂兵長は二年前に博人の世話になったらしい。

本当に博人はまったく覚えてないのだが、彼にとって博人は人生の恩人なのだそうだ。

そういえば、着隊初日に「お久しぶりです」って言ってたな？

（俺、何かやったっけ？）

「すまん……やっぱ全然思い出せん」

「えー」

その日、博人は大隊本部ではなく中隊で、自分の分隊員をつれて中隊駐輪場にきていた。

兵站課から配備予定の７７式銀輪車の一部（１０台）が到着したとの知らせを受け、小坂兵長に命じて分隊員を呼び寄せ、中隊地区まで乗車搬送をしてきたのだ。

駐輪場に７７式を納めながら、小坂兵長はふと昔話を振ってきたのだが、博人はまったくそれが思い出せなかった。

小坂兵長によれば、前にいた部隊で下士官候補生試験を受けるも惨敗してヤサグレていたところを、博人の説教によって改心し、無事に下士官への道が開けたのだそうだ。

小坂兵長は不満そうに頬を膨らませているが、覚えていないものは仕方がない。

身長はおおむね１６０ｃｍ前後と軍人としては小柄な痩せマチョで、童顔で丸坊主なために軍服を着ていなければ高校球児に見えるだろう。本人にそのことを指摘すると、酒を買うときに年齢確認をされた経験があったそうだ。

懲罰大隊にきた経緯を聞いたところ、実家が近くにあることと、

下士官として実員指揮を学ぶためにわざわざ志願したらしい。
そういえば、同じ県内には博人が学んでいた第４下士官学校があるが、懲罰大隊に研修に来たこともあった。部隊によっては、士官候補生や下士官候補生指定者に実員指揮を学ばせるために、一時的な移動をさせることもあるという。懲罰兵の年齢は若くても２７歳で、若手の士官や候補生にしてみればそのほとんどが年上で、それを威厳を持って指揮することはかなり大きな経験になることだろう。
７７式をすべて納め終えると、博人は分隊に事後の指示をだした。
「事後の指示を達する。３０分休憩したのち、そこの空きスペースで分隊にこの銀輪車の概要と取扱いについて教育する。銀輪車１台と整備用具一式を準備しておくこと。以上」
「気を付け！」
指示を達し終えると、一秒の間を開けることなく小坂兵長は分隊員に号令をだし、博人に敬礼した。
「事後の行動にかかります」
博人が答礼を返すと、小坂兵長はすぐに分隊の休憩を取り仕切りはじめた。
「銀輪車は鈴木の搬送したやつを出せ！　佐藤と山田はそこのスペースを片づけて受講準備！　中田と林田は中隊倉庫から工具とウエスを掌握、ついでに事務室行って水分をもらって来い」

（たいした副官だな……）

着隊してからというものの、博人は小阪兵長の有能ぶりにずいぶんと助けられている。
その部隊の特性や職務によって指揮官と副官の関係は異なるが、部隊を１個の身体として考えれば、指揮官は頭であり、副官とは心臓とも言うべき役割を持っているといえるだろう。
平時から常に部隊の人員の状況（身上や練度、健康状態）や装備の保有状況を把握し、指揮官の不在時には指揮官の命令や企図、方

針に応じて指揮官の目の届かないところで隊を指導・監督し、指揮官が隊を思い通りに指揮できるように常に部隊を整頓している。

おかげで指揮官は部隊から離れても、上級部隊からの命令受領と隣接部隊や関係各所への調整に集中でき、隊に戻ればすぐに行動を起こすことができるわけだ。

指揮官に部隊の状況を問われれば、まるでゲームのメニュー画面や辞書の検索機能のようにそれを明示し、意見の具申を求められれば指揮される立場からそれを具申し、指揮官の作戦・訓練立案に大きく寄与する。

指揮官はそれによって部隊の可能行動（何ができて、何ができないか）を知ることができ、上級部隊の方針に応じてその中から適したものを選択するだけで済む。

敵を知り己を知れば……という言葉があるが、副官は部隊においてその「己」にもっとも精通し、もっとも責任を持つ役職といえるだろう。

課業後、夕食を終えて生活廠舎に戻った博人は、小阪兵長から本日の訓練についての報告を受けていた。

あのあと、博人は７７式歩兵銀輪車の取扱いとその概要について、取扱いの中でも特に重要な分解・結合、整備方法、さらには輪行時における収納方法や背嚢への縛着方法などの実技を実演し、分隊員の概ねの理解を得たことを確認して、事後は小阪兵長に命じて分隊には終日反復演練を実施させたのだ。

本来であれば中隊の銀輪係も兼任している博人の仕事であるが、博人にはまだ大隊本部における仕事が残っていた。

そのため本部勤めが多い博人は、数日前から課外時間を利用して小阪兵長に博人が所有する試作車と参考資料を使って教育を行い、博人による監督がなくとも概ねの取扱いができるほどの練度にして分隊への普及教育に備えていたのだった。

「本日教育された概ねの動作はできるようになりました。今後の課題は、自分も含めて走行形態から輪行状態までの収納速度と走行形態までの組み立て速度の両方を上げることだと思います」
「収納までどのくらいかかった？」
「概ね、１５分弱かと。組み立てには作動点検も含めて２０分かかりました」
博人であれば分解から収納まで5分と少し、組み立てなら収納状態から出したとしても作動点検も含めて１０分もかからない。
「それじゃあ電車を乗り過ごすな……。中隊には俺のほうで話を通すから、明日から分隊は引き続き反復演練、今の3分の2くらいまで時間を短縮してくれ。中隊副官と作戦・訓練係には俺のほうで話を通しておく」
「一日中、ですか？　さすがにずっとバラしたり組んだりというのは……、走らせたりとかして気分転換してもよろしいでしょうか？」
「それもそうだな。中隊全体への普及教育までに間に合えばいいから、そのへんは兵長に任せる」
「中隊への教育開始はいつくらいになりそうですか？」
「兵站課によれば明日以降も７７式は逐次搬入されて、５月までには揃うだろうとのことだ。まあ、取扱いの訓練だけなら2～3人に1台もあればいいし、２週間以内には中隊で訓練が始められるだろう」
「了解しました」
「俺は本部勤めが多いから何かと不在にすることになるが、よろしく頼むぞ。何かあれば、すぐに報告してくれ。以上」
「事後の行動にかかります。」
小阪兵長は博人に敬礼をして、室内の自分のロッカーへと向かうと、ジャージに着替え始めた。そのまま入浴（風呂ではなく川）にいくようだ。
「軍曹も行きませんか？」
「そうするか」

小阪兵長の誘いに、博人も自分のロッカーに向かったのだった。

小阪兵長は廠舎の玄関で博人を待ちながら、ふと昔を思い出す。

『何で軍人に一般教養が必要なんですか？　体力とか武器の扱いとか、そっちのほうが重要でしょ？』

体力では誰にも負けなかったものの、筆記試験で下士官候補生試験に惨敗した小阪兵長（当時上等兵）は、当時別の駐屯地から合同訓練のためにきていた一人の伍長にそう問い詰めた。

『漢字が読めなくて、歩兵操典も含めた教範が読めるのか？　理解できるか？　文法がわからなくて、書類が書けるのか？　だから国語は必要だ。　数学がわからなくて、前方公開法や後方公開法ができるのか？　射撃理論や弾道学は数字と確立との戦いだぞ。発破やるとき、爆薬の計算とかどうする？　地理や歴史の理解が無ければ、行動するその土地の特性は見えない。法律の遵守は軍人として当たり前だから、法学への理解は必要だ。だから社会を勉強するんだ。

天候・気象は作戦に大きく影響する。人体の構造や軍馬も含めた家畜の生態を知らずに、兵馬の運用や救急処置ができるのか？　物理は弾道学に大きくかかわるし、実際の作業では梃子の原理も含めてよく使うだろう？　だから理科を学べ。　敵を倒しその所有物から重要書類を見つけたが、外国語だった。無線で敵の会話を偶然傍受したが、外国語だった。一緒に戦う同盟国兵士が日本語を話せない。そういうときに必要になるのが外国語で、最低でも必要なのが英語なんだ。

軍人に限らず、社会人になっても……否、社会人ならこうした教養は大切なものなんだよ。

ここでお前が下士官を諦めようが知ったことじゃないが、どこに

いったって上を目指すなら確実に避けて通れないことだけは忘れるな』

そう説教をくれたのが、当時まだ伍長だった博人だった。

それから必死に勉強をして、下士官候補生になった。勉強だけでなく、あらゆる分野に手を伸ばし技術を習得していったが、どの分野に進んでもその教養は役立った。

懲罰大隊に来て、副大隊長が引き抜いたという新任の分隊長の名前を聞いたとき、小阪兵長は鳥肌が立った。

再開した博人は、軍曹へと昇進していた。さらには、陸軍の研究室でも研修をして成果を挙げ、懲罰大隊では大隊付銀輪指導官という大役を任されてやってきた

「おれもいつか、あんなふうになりたいなぁ……」

憧れからそうつぶやいた小阪兵長だったが、博人が下士官になる努力のもとが結婚の回避であったこと、大役を得られたのは陸軍独身者への見せしめのために人事が働いていたことを、彼は知らない。

13　副分隊長（後書き）

小阪兵長は、博人が中佐の引き抜きでやってきた優秀な軍曹だと思ってます。

１４　行進訓練（先遣隊前進命令下達）（前書き）

稲葉軍曹率いる、第１中隊第１小隊第３分隊が、行進訓練に参加。
先遣隊として行動を開始します。

１４　行進訓練（先遣隊前進命令下達）

「分隊、武器・装具点検、異常の有無を報告しろ」

博人の指示を受け、分隊各員は各々の武器と装具を点検する。

軍用列車の人員運搬用車両の薄いシートに腰掛け、自身の身に着けた武器と装具、目の前の床に下ろした戦闘用背嚢とそれに縛着された７７式歩兵銀輪車を点検した彼らは、並んで座ったシートの端から「異常無し」を逓伝（ていでん）する。

「背嚢担げ！」

全員の異常がないことを確認し、博人は分隊員に背嚢を背負わせ、各人は両隣と協力しつつ狭い車内で肩と腰のバンドを調整する。

程なくして、列車は目的地の駅のホームに到着する。

「下車用意！」

「「下車用意！！」」

博人の号令を、分隊が復唱する。

その復唱の声と同時に、列車の扉が開いた。

「下車！」

「「下車！！」」

博人を先頭に、彼の分隊は事前に練成したきたとおりの順序で。迅速にホームに降り立ったのだった。

３年くらい前だったろうか？　旅団による九州地区防衛を想定した鉄道による長距離機動訓練に参加したことがあったが、背嚢や銀輪車とともに人員運搬も可能な軍用貨物車両に鮨詰めにされ、列車の揺れと車内に篭った男たちの汗の臭いに吐き気を催しながら、痔になりそうなくらい薄くて座り心地の悪いクッションのシートに腰掛け、半日かけて目的地最寄り駅に着いたときには、疲労で体が石のように重く、もう何もしたくないと思った。

そんな過去の自分と同じ光景が、振り返ればそこにあった。
もっとも、乗車時間は３０分程度だが。

博人が乗ってきた軍用列車は、先頭から人員用車両２両、軍馬用車両１両、残りは汎用型の貨物車両３両で構成されている。
博人の分隊と将校・下士官たちは快適な先頭の２両に乗り、軍馬用には当然将校たちの愛馬や兵站物資牽引用の軍馬が乗っている。
残りの３両の貨物車両には、今年懲罰大隊に入隊したばかりの懲罰新兵たちが彼らの装備品のほかにさまざまな訓練用物資とともに鮨詰めにされていた。
博人たちの車両はホームに横付けされたが、それ以外は荷物同然の扱いで線路から下ろされる。
軍馬は車両出口に専用の階段が取り付けられ、１頭ずつ丁寧に下車していくが、懲罰新兵たちはふらふらになりながら車両出入り口備え付けの足場から飛び降り、協力し合いながら自分たちの背嚢や武器、銀輪車を下ろしている。
新兵教育要員の下士官たちが、すぐに彼らの元に走り、指示と罵声を浴びせている。

「おら！　車内休憩は終わったぞ！　さっさと降りろ！」

「自分の装備を持ったら、１５分以内に分隊長の掌握下に入れ！」

「時間かけりゃ誰だってできるんじゃ！！」

博人の分隊は早々に駅前広場の一隅に集結し、尻を蹴られながら集合する彼らに同情の視線を浴びせながら、７７式を走行状態に組み立てていた。
いち早く組み立てた博人は、

「命令受領に行ってくる。事後の指揮は、副分隊長がとれ」
背嚢と銀輪車を置いて小銃のみをもち、懲罰新兵教育隊長のもとに走り出した。

数日前、博人は秋山少佐を通じて教育隊にある要望をだした。

「教育隊の行進訓練に便乗して、自分の分隊を使って先遣隊動作の訓練をやりたい」

要望はあっさりと通った。
博人がそんな要望を出したのには理由があった。
現在の博人の役職は、大隊付銀輪指導官であり中隊の銀輪係と１コ分隊の長を兼任している。
銀輪指導官や銀輪係は、その部隊の銀輪機動の経路選定を行うために行進部隊の先頭を任されることが多い。
行進部隊の先頭には２種類あり、前衛部隊と先行班がある。
前者は部隊主力の先頭を行進しながら定められた経路上を最前線で接敵行進を行う部隊であり、敵とぶつかった場合はこれを撃破して部隊主力を遅滞させることなく前進させ、最終的に敵の主力もしくは主たる防衛線を解明する。大隊規模の行進であれば、前衛中隊があり、その前には前衛小隊が、さらにその前に前衛分隊が位置する。もし、大隊の銀輪化歩兵のみで行進する場合、博人はこの前衛分隊の指揮を任され、彼の分隊が前衛分隊に指名される可能性が高かった。
後者は部隊主力に先んじて前進して経路や休止点の偵察および誘導を行い、主力の前進支援を主任務とする部隊であり、１コ分隊もしくは２~３人組の少数で、主力の目として行動する。これもまた経路に責任を持つ役職である以上、博人が受け持つ可能性が大であった。

もっとも、第2懲罰大隊には銀輪化歩兵よりもさらに機動性の高い、乗馬歩兵化中隊である第4中隊があるので、大隊規模の行進であれば彼らが不在でない限り、博人が前衛分隊や先行班を指揮することはないだろう。さらに言えば、行進計画を早期のうちから各隊へ十二分に徹底しておいた場合、博人が先頭に立つ必要がなくなる場合もあるし、博人以外にも銀輪特技保有者はいる。

しかし、自分の役職が分隊の任務に影響する可能性が高い以上、分隊には今後の任務や訓練に備えて十分に経験を積ませる必要があると博人は考えたのだ。

「分隊、集合！　地図を中心に肩膝をつけ」

教育隊長から命令受領を終えた博人は地図を広げ、分隊員を集めた。

「番号、始め！」

「1！」

「2！」

「3！」

・　・　・

「8！」

小阪兵長を除く分隊員は各々の番号を発していく。

全員が固有番号を把握していることを確認し、続いて博人は各人の役職を達する。

「一番、一組長！　2番、一組小銃手！　3番、一組小銃手！　4番、二組長！　5番、二組擲弾手！　6番、二組小銃手！　7番、三組機関銃手！　8番、三組弾薬手！　副分隊長は三組長を兼務しろ！」

役職を達し終えると、続いて地図を用いて地点を示す。

「地点を示す！　現在地、Ｄ駅前広場！　北の方向、分隊長の指すこの方向！
地図に目を転じよ！
現在地から西方約２００ｋｍ、目的地：森林公園！
・
・
道路について示す！
・
・
」
今回の行進訓練における目的地や経路上の重要な地形や建物を示すと、続いて分隊に命令を下達する。
普段ならここまでキッチリとした命令下達動作などやらず、要点のみ伝えてさっさと動くところだが、今回は教育隊長から動作を見学させるとお達しを受けている。
気がづくと、教育隊の下士官たちが懲罰新兵の一部を連れて、博人たち分隊の様子を見学させていた。
まあ、たまには面倒でも、キッチリやるのも悪くはない。
ちなみに今回の訓練の想定は、最前線で戦う我の部隊の増援として教育隊が銀輪機動行進で前進する……というものだった。よって、経路は味方勢力圏内であり、一部斥候が発見された以外には特に脅威はない……とされている。
「命令！
敵情および我の状況について、変化なし

分隊は、増援主力である教育隊の先遣隊となり、０９３０現在地を出発。示された経路上を前進、経路上を偵察および休止点の安全を確保し、主力を誘導、その前進を援護する。
前進隊形：分隊縦隊を基準とするも、細部は経路の状態を見て示す。
前進順序：一組、二組、三組、副分隊長の順

前進経路：A道沿い、当初の予定と変化無し！　前進不可能の場合は、主力の指示を仰ぐ。
前進速度；１０～１５ｋｍ／時とするも、地形を見つつ示す。
統制点：第１－－、第２・・・、第３〇〇〇、……
休止点：統制点に同じ
要注意地点：〇〇〇〇隘路、△△橋付近。

各組の任務！
一組：分隊の前方を警戒。分隊長から示された場合、警戒員2名を差し出せ。
二組：分隊の右側方及び上空を警戒。経路上の要点において、主力誘導のマーキングを実施
三組：分隊の左側方及び後方を警戒。示された場合、主力への連絡員を出せ。
副分隊長：分隊最後尾を前進し、隊列の監視及び3組を指揮せよ。

兵站！
弾薬：小銃、各人１２０発。機関銃、８００発。擲弾、各種合計３０発！　弾薬手携行の予備弾薬、小銃６００発、機関銃１０００発。非常用信号弾、3発。
糧食：戦闘用携行食、各人3食。
衛生：患者発生時については、現地に残置し、後続の衛生小隊の馬車による収容を待て。

指揮及び通信
分隊長は主として1組に同行し、分隊の先頭を前進する。
通信、無線：警戒レベル2。分隊内通信は、警笛、逓伝及び手信号を実施。

合言葉！　独身～無罪！

……以上、命令終わり」

１４　行進訓練（先遣隊前進命令下達）（後書き）

合言葉：独身～無罪

……稲葉軍曹の、切実な思いと、陸軍に対する精一杯の皮肉です。

１５　行進訓練（戦闘指導）（前書き）

命令下達をしたら、すぐに行進開始ではありません。
短いですが、更新します。

※少し手直ししました。

15　行進訓練（戦闘指導）

「続いて、戦闘指導！」

命令下達を終えた博人は、続いて戦闘指導に移る。

命令とは、決心に基づく指揮官意志の発動であり、指揮下部隊に実行を命ずるものだ。指揮官が任務を遂行するために部隊に対し、作戦構想と部隊の任務、その他必要な事項を示し、その行動を律しつつ、実行を命ずるものである。

しかし、部隊をすべて命令で律して雁字搦めに統制しては、各隊、各組、各人の動作は制限されてしまう。

したがって命令は、戦闘部隊全体の決定事項とその目的、そして絶対遵守の統制事項を、指揮官が自身の企図と戦域に合わせて必要最小限を下達する。そうすることによって、指揮官の保有する各隊、各組、各人の自主裁量の余地を確保し、その力を最大限に発揮させる。

では、その後に行われる戦闘指導とはなにか？

命令が指揮官の上より来た決定事項と目的を部隊に徹底させ、戦闘指導は作戦規定、手段や方策と言えるものを徹底させる。

博人の立場で言えば、戦闘指導は分隊長としての企図の徹底であり、命令の細部補足であり、任務遂行に必要な事項への認識の統一である。

「隊形については分隊縦隊を基準とするも……」

今回の行進訓練で特に重要なところといえば、道路状況に合わせて変更される各種隊形、経路上の要注意地点の通過要領、さらに分隊独自の徹底事項などであろう。

それらを口頭および身振り手振り、さらには兵棋などを用いて、組および各人単位で徹底する。

「以上、質問！」
「「無し！！」」
「では質問する。　1番！　一列縦隊時の位置は？　兵棋で示せ！」
こちらの命令と指導を理解しているか、各人が自身の任務を理解しているか、今度は分隊長自ら質問して確認を取る。
各人の理解と認識を確認し、認識の統一に異常のないことを確認した博人は、ふと周りを見渡した。
分隊ではなく、今この光景を見学している教育隊の下士官や一部の懲罰兵をである。
教育隊要員の下士官たちはつまらなそうに欠伸をし、懲罰新兵たちは興味を失っている。
（堅すぎたな……）
陸軍下士官ならこの程度のことは下士官学校で嫌というほどやらされたし、最近入隊したばかりの懲罰新兵は何をやってるかあまり理解できないために興味も薄れてきただろう。特に懲罰新兵は電車に鮨詰めにされた疲労が残っているのか、なんだか士気が低い。
これから長距離を無言で走り続けないといけないのに、こうも冷めた空気はどうなんだろう？
先遣隊である博人の任務は、経路上の偵察と安全確保。彼らを無事に目的地に前進させる責任は、教育隊の銀輪係と教育隊長にあるため、彼らの士気の維持は向上は博人の役目ではない。
しかし、士気の低さは行進速度に影響する。注意散漫になって事故をおこしたり、気力不足で足が止まったり、極端な話では訓練に嫌気がさして逃亡兵でも出たら最悪だ。
もっとも、事故はともかくとして、足が止まるようなやつは尻を叩きながら下士官が追い立てるだろうし、逃亡兵を許すほど将校・下士官の監視の目は甘くない。
大げさな話かも知れないが、懲罰大隊ではたとえ訓練でも逃亡兵が出ようものなら、将校には常時携帯している拳銃による射撃許可と、下士官への抜刀許可が下りる。陸軍の一般部隊であれば戦争時

ならともかく、訓練くらいでは精々捕らえられて上官から殴られ、厳重注意か懲罰房送りがいいところだろう。

とりあえず、たとえ自身の任務と離れていても、部隊の士気が低いのはあまりよくない。

博人は一つ息をつくと、分隊を見渡した。

「戦闘指導を“補足”する！　命令とは別で、要注意地点を達する。第２休止点から経路上３００ｍ先、Ｔ高等学校周辺には、敵の潜伏斥候が予想される！」

今回の行進訓練に、そんな想定はない。

博人の言葉に、分隊員は目を瞬かせ、見学していた下士官たちは何事かと博人を見た。下士官たちの動揺は、懲罰新兵にも伝わっていく。

その場の全員の注目が集まったのを確認して、博人はさらに口を開いた。

「予想される斥候の脅威は大であり、分隊各員は走行中も眼鏡（がんきょう）を準備し、発見次第速やかに報告せよ！　なお……」

博人は自身の口元が、笑いで緩みそうなのを感じて、必死でこらえる。

ここで誰よりも先んじて笑ってしまっては、台無しだ。あくまで堅く、真面目な顔で、厳格な戦闘指導を演じなければ。

「敵斥候はセーラー服の着用が予想される！　とくに“強風時”は速やかに発見し、分隊長に報告、臨戦態勢をとれ！」

周囲からドッと笑い声が上がる。これで少しは士気も上がったろう。

我ながら下衆なジョークだなと思いながら、とりあえずウケたことと、周囲が和んだことにホッとする。

博人は立ち上がると地図をしまい、分隊全員に達した。

「分隊縦隊、前進準備！！」

１５　行進訓練（戦闘指導）（後書き）

稲葉軍曹、精一杯のジョークです。

ここまでの話で感想あれば、どうかよろしくお願いします。

１６　行進訓練（田園風景と中休止）（前書き）

稲葉軍曹率いる先遣隊は出発。
ホッと一息つける、休止点におけるお話です。

１６　行進訓練（田園風景と中休止）

出発から既に3時間が経過している。

博人の分隊は駅前から続く市街地を抜け、一帯を田畑に囲まれた地域を通る国道を一定の速度でペダルを漕ぎながら、次の休止点に向かっていた。

４月も下旬、正午も過ぎれば、日差しもそよぐ風もどことなく暖かく、心地がいい。

土の香りがして、ふと周辺の田圃を見やると、農夫たちが田植え定規を転がして、水田表面に方眼の目を刻んでいた。

別の田圃では、方眼の目に足を突っ込み、腰を曲げて線の交点に苗を植え付ける農夫の姿がある。

そんな農夫に混じってちらほらと、少年たちの姿が見えた。小学生低学年くらいの小さな子供から高校生くらいまで年齢層は幅広い。

（そうか……そういう時期か）

今度の休止点は、そんな田園風景が見渡せる、古く寂れた神社の中にある公園だった。

周辺の農道に小阪兵長率いる三組を誘導員として配置し、博人は残りの分隊を連れて公園内を全周警戒隊形で索敵、安全化していく。

周辺には民間人もいるため、銃口は下げたままで公園と境内を巡っていく。

危険の無いことを確認し、博人は無線で誘導指揮の小阪兵長と教育隊本部にその旨を伝えた。

「三組は主力先頭を誘導したら、報告、分隊に戻れ。主力は中休止のため、分隊は主力先頭到着から３０分後に出発する。各人、今のうちに食事をとっておけ」

しばしの休憩時間を設け、博人は周辺の田園風景を見渡す。

田植えの終わっていない土色と、田植えされた薄緑の境界線が、列を組んだ農夫と子供たちによって構成されている。

視点を変えると、農道の土手に腰掛けて昼食をとっているグループもあった。

そんな風景を見ながら、博人はここまでの経路上で感じた違和感に納得した。

ここに来るまでの休止点の一つに小学校があったが、そこには子供が誰一人いなかった。経路上から見えた中学校も、人の気配がなく閑散としていた。

４月も終わりを迎えるこの時期が、この地域の田植えシーズンのようだ。

この国には、富国強兵における方針の重要項目の一つに「食料自給率の向上」がある。

政府は段階的に農業従事者人口を増やし、その基礎を作る目的で義務教育での農業体験が必修となっている。

それに便乗して市町村や教育委員会が指定期間や制度を設けて、だいたいこの時期になると稲作農家の密集する地域は学校が休校になり、子供たちは実家や地域の田植えに駆り出される。田畑の少ない地域では、人手不足な農村に手伝いにいかせることもある。

今となっては、子供が田畑で土にまみれ土をいじるのは、この国では当たり前の風景だった。

自動車が全盛だった頃なら、田植え用の農耕機械で農夫たちだけでどうにでもなったが、燃料統制でガソリンが手には入らない現在では手作業が当たり前になっている。一部の農家ではソーラー発電や蓄電池で動く農業機械を使っているが、製作コストや発電コストの問題から一部の豪農が持っているくらいであまり広まってはいない。

博人も子供の頃は田植えと稲刈りシーズンには、祖父の田圃や近所の農家の手伝いに行ったものだ。

小学生の頃なら、勉強が嫌いで学校が休みになると喜んだものだ

が、軍籍を志した中学以降はトレーニングだと思いながらも、将来の下士官試験のためにもっと勉強したいと思ったものだ。

ちなみに博人の同級生たちはといえば、農家の跡取りのような使命感の高い者を除けば、遊びたい盛りやお洒落したい年頃になると、土まみれでほぼボランティアなこの期間は、文句と不満が飛び交った。

そんな思春期時代を過ごし、中学を卒業した博人は地元の進学校を受験したのだが、陸軍を志す博人と違い、高い学歴で都会にでて農業と縁のない生活をしたい学友たちとの熾烈な受験戦争に発展したのは言うまでもない。学業重視で農業実習がないのも競争率に拍車をかけていたが。

そんな過去を回想しながら、博人は公園入り口付近に背嚢を下ろし、周辺警戒は分隊員たちに交代で任せて食事をとる。

フスマとオカラ、米糠を原料に造られた糖液を練り込んで造られた、出来損ないのソフトクッキーのような携帯口糧をかじり、ボソボソとした食感のそれを水筒の水で流し込む。

栄養価が高く、腹持ちも良く、お菓子のように手軽に食べられるのだが、美味しいものではない。

しばらくすると、小阪兵長から無線で教育隊主力先頭の到着の知らせが届いた。

「了解。誘導しつつ、こちらに合流せよ。なお、先遣隊出発は１３３５とする」

『了解』

無線通話を終えると、博人は数人の農夫と子供たちがこちらに近づいてくるのを確認した。

「どうもお勤めご苦労様でございます」

グループの中でもとくに年配な初老の男性が、博人に深々と礼をした。

男性によると、田植えの休憩をこの公園と境内で過ごしたいらし

い。

「わかりました。もうすぐここには、中隊規模の部隊がきますので、あちらの隅でよろしいですか？」

「はい。どうもありがとうございます」

男性はまた深々と頭を下げ、博人に礼を述べると、一行を連れて指定された場所に茣蓙を広げて、弁当を囲み始めた。

地域にもよるだろうが、農家の人間は兵隊に対してこちらが申し訳なるほどに腰を低く接してくる。

農本思想に基づいたこの国の教育と社会制度の賜物といえるのだろうか、「国家の富の財源は農業にあり」という理念の下に、農業従事者は社会保証や税制面での優遇がされるなど、社会的に高い身分を保証されている。彼らは土着して作物を育て、食料自給率という国の生命線を左右する存在だからだ。

政府は半世紀も前から、燃料枯渇で輸入コストが高騰していくのを受けて、海外から食物の輸入を段階的に制限してきた。

同時に勤労農村制度や農業従事者や第一次産業従事者の優遇措置を実施し、強制的にかつ段階的な食料自給率向上に一定の成果を上げてきた。

それによって、輸入食料への依存を局限し、自国内での地産地消を推進、国際競争から脱却した自己完結国家への道を歩み始めた。

しかし、そんな国家を支える実質社会的最高位にあたるべき職業農夫たちには、もっぱらの不安があった。

彼らは財産であり生命線である田畑という土地から、容易に離れられない。

彼らは自らの土地が、戦火や災害晒され、大規模なテロや犯罪に巻き込まれることを非常に恐れているのだ。

そんな彼らの平穏を守り、非常時の安全確保や救命が出来るのは、“軍隊”という組織しかあり得ない。

そんな彼らにとって、自分たちの土地を含めて国土を防衛する使

命を持った軍隊は、守護神以外の何者でもなく、兵士に対して腰が低くなるのも当然といえた。
　ちなみに、商売人（ビジネスマン）や職人（エンジニア）は土着する必要はないし、蓄えた財産を持ち、仕入れや製作した商品を売り歩き、持っている技術を売りにして、いくらでもって河岸を変えられるうえに、海外に脱出も出来る。そんな彼らは直線的な商売相手（客）でない限り、軍人には冷たいところがあった。

　教育隊主力の誘導が完了し、教育隊銀輪係と次の経路についての再確認と調整を終えた博人は、分隊を掌握させた小阪兵長から報告を受けた。
「副分隊長以下９名、人員、武器、装具、銀輪車異常なし。健康状態、鈴木懲罰兵が両大腿部筋肉痛、処置済みで行進に影響なし。その他、健康状態異常なし。なお、全員食事は終了しております」
　命じなくても細部を把握する有能な副官に、博人は感心しながら分隊に指示を出した。
「分隊は予定通りの時間に現在地を出発する。１分前には道路上に隊形をとれ。……鈴木、いけるか？」
「衛生兵から鎮痛剤をもらいました。平気です」
「よし。時間まで引き続き待機。脚をしっかりほぐしとけ」
「「了解」」
　出発時間まで、まだ１０分あった。
　博人は再度地図を見やる。
　経路はまだ３行程（約４０Ｋｍ）が終わったところだ。
　視線を周囲に移すと、筋肉痛や疲労を訴える懲罰新兵たちがチラホラと見え、博人は溜め息が出る。
　ここまではまだ平坦な道だからいいが、残る距離約１６０Ｋｍの途中には、自転車を押して登るような山道も待っている。
　目的地到着は、深夜になる予定だ。疲労で眠くなる上に、視界の

悪さから事故の危険も考慮し、速度も落とさざるを得ない。
博人の分隊は慣れているからいいが、つい先月まで一般人だった懲罰新兵は大丈夫だろうか？

（まあ、本意も不本意も限らず、誰でも通る道か。せめて、経路の安全だけは確保してやらんとな）

博人は自身が新兵だった頃を思い出し、なんとかなる……はずと結論づけて、地図上の経路にまた目を移したのだった。

１６　行進訓練（田園風景と中休止）（後書き）

用語の解説

・フスマ＝小麦の籾と粒の間、米で言うところのヌカに該当する部分。栄養価は高いが、味はイマイチ。よしたに氏の著書「僕の体はツーアウト４」によると、これで造られたフスマパンは、ボソボソの食感でプレーンタイプは新聞紙を食ってるみたい……とか。

・米糠を原料に造られた糖液＝現在では安い日本酒の原料等にも使われ、そうしてできた酒は“米が原料だから純米酒”として扱われるとか？　本作の携帯口糧では、甘味付けとして使われている。ちなみに米糠は栄養価が高く、明治期は脚気予防に注目を浴びた。

・オカラ＝説明はいらないよね？　食品に転用の他、飼料や肥料など利用されているけど、実際殆どが産業廃棄物で棄てられちゃう。美味しいのに。

「国家の富の財源は農業にあり」

金があっても、食物がなければ人は生きていけないよ？　改めて、農家の人には感謝の心を。

ちなみに現在の日本の食料自給率は４０％そこそこ。なのに飽食の時代って……この作品読んで、少しは考えてもらえると嬉しいです。

１７　行進訓練（夜間行進）（前書き）

行進訓練も終盤に差し掛かりました。
とうとう夜間を迎えますが、省エネ社会の夜道は一筋縄ではいきません。

１７　行進訓練（夜間行進）

「歩行者！　停止！　分隊、停止！！」

夜闇の中、銀輪車の前照灯が照らし出した数人の人影を見つけて、博人はブレーキレバーを握りながら叫んだ。

驚いて道路の右に寄る歩行者たちの背後ギリギリで停止した。

「左寄れ！　前進！」

すぐに走行を開始するも、先ほどまで高速にシフトをあげていたペダルは重い。

すぐにシフトレバーを軽速に変換したが、それがギアに反映されるまで、半回転を要した。既に１００ｋｍ以上を走行した脚の筋肉が悲鳴をあげた。

博人は彼らの左手から追い抜くと、擦れ違いざまに彼らの服装を確認した。

（クソが！！）

３００ｍほど進んで停止し、博人は無線で教育隊主力につないだ。

「こちら先遣隊。放送！　放送！　第９統制点手前約４ｋｍ住宅街、“無灯火、無表示の歩行者”、３名！　注意されたい！」

主力からの返信を確認しつつ、博人は分隊の異常の有無を確認し、前進を再開した。

２１００時、第９休止点（約１３０ｋｍ地点）に到着した博人は、分隊への全ての指示を終えて、眠気覚ましのカフェイン錠剤を噛み砕き、先ほどの歩行者を思い出して怒り任せにそばにあった立ち木をぶん殴った。

「酔っ払いが……警察ももっと取り締まれ、クソが！！」

擦れ違いざまに確認した歩行者は3人いた。
おおよそ20代半ば、会社帰りか何かだろうか？　黒のスーツ姿だったので、月齢にも恵まれず、ただでさえ光源の弱い自転車の前照灯では発見に数瞬を要した。どこかで一杯引っ掛けてきたのか、足取りがかなり怪しかった。
12時間近くにも及ぶ行進で疲労もピークに近づき、夜間とはいえ時速12kmで走っていたはずだ。体の反応と機体の速度からして、接触を免れたのは運が良かった。

今は亡き祖父から聞いた話では、昔は街中では夜でも光が溢れていたそうだ。
道にはあちこちに街灯があり、家では誰もいない部屋でも照明は点けっぱなし、深夜や24時間営業の商店も珍しくなく、客寄せの看板や広告がライトアップされ、屋外のそこら中が明るかった。
燃料も電力も、まだ余裕のあった時代の話だ。

そんな昔話を思い出しながら、博人は周囲を見回した。
今、博人たちの分隊がいるのは、住宅街の中にある少し広めの公園だ。
公園を照らす外灯など一切なく、周囲の道路にも事故が予想されるような交差点などの要所を除いては街灯はない。寝静まるには早い時間だが、住宅街はどの家も一部屋程度しか明かりが灯っていない。ところどころに夜も営業している店舗があるが、店内だけを照らす明かりの効果など屋外には微々たる物だ。
「夜は暗い」
これがこの国の常識だった。

金さえあれば電気が買えた時代とは、今は違う。
原発はとっくの昔に停止した。火力発電は化石燃料枯渇によって、

もう殆ど残っていない。

政府は電力統制を行っている。この国の電力はとにかく希少だ。

そのため、地域差はあるが1世帯あたり、もしくは1店舗あたりに対する電力供給量は制限されている。

基本的に電気は発電施設を中心に地産地消することになっている。

供給される電力はその地域の発電施設の発電能力（安定供給可能量）を背景に、役所の住民調査によって1世帯、1店舗辺りの使用許可量が定められる。許可量を超える電力の使用は認められない。

建物のブレーカーには警報機があり、世帯・店舗の許可量を超える電力を使用しようとすれば警告が発せられ、無視していればいずれブレーカーが落ちる仕組みになっている。

もし、許可量以上の電気が使いたいのであれば、太陽光発電装置や蓄電池を設置して、自家発電や余剰電力の保存を行う等の措置をとればいい。ただし、これは装置単体の値段だけでなく、設置コストや定期整備や故障時の修理費等がかさむため、よほど裕福な家庭くらいでしか広まっていない。

そして重要なポイントは、単純に電気が高額であることだ。

結果として国民の節電意識は高くなり、各家庭は夜になると可能な限り一部屋の照明に集まるようにし、各店舗は看板や広告のライトアップをやめて客足を見て深夜営業も控えるようになり、地域は街灯の設置を必要最小限に抑え、この国の夜は月明かりと星明りが映えるほどに、すっかり暗くなってしまった。

そんな現代の、そんな夜道だからこそ、交通には十分に注意し、配慮しなくてはいけない。

自転車や馬車は必ず明かりを灯し、乗馬している馬や騎手も何かしらの照明や反射材を設置する。

それらの配慮は、道を照らして自らの通行の安全を得るためだけのものではない。

道路を通行している他者にも自身の存在を知らせ、お互いに安全

を確保しあうためにも必要なものだ。
　こうした配慮は、道路交通法で義務付けられている。事故を防ぐためなのだから、当然だ。
　夜間走行する自転車や馬車、騎手は必ず前照灯となるものを設置し、左右後方にも自身の存在を知らせる反射材かテールランプを設置しなければならない。
　自転車であれば備え付けの前照灯と反射材がそれに該当し、馬車であればライトの他にも行灯や提灯でも認められる。乗馬しているのであれば、左右と後方に馬具の要所に反射材を取り付け、前方にはヘッドライトか馬体胸部にライトを取り付けるでも良い。
　そして、こうした配慮の義務は“歩行者にも適用”されている。
　夜間、道路を通行する歩行者は、進行方向を照らす明かり（懐中電灯、提灯等）を携行し、周囲に存在を知らせるために夜行タスキやベスト、反射材を装着しなければならない。地域によっては、ヘルメットの着用を義務付けているところもある。
　仮にもし歩行者がこの灯火と表示の義務を怠った場合、警察に発見されれば厳重注意を受けた後で違反切符をきられ、最悪の場合は罰金だ。事故にあったとしても、自転車や騎手が灯火と表示をしていたのであれば、歩行者に非が有りとされる。
　とはいえ、仮に歩行者に非があったとしても、自転車や馬で人に接触するのはいい気分ではない。自分も相手も怪我をする可能性が大なのだから当然だ。
「明るいうちに帰るつもりで忘れてた」
　そんな言い訳は通用しない。
「そんなものつけてなくても、私はちゃんと周りを見ているから大丈夫」
　事故にあったのはそういう奴だ。
「自転車にはライトがついてるから、見つけられないわけがない」
　そう言ってた奴が、無灯火の歩行者に接触した。
「かっこ悪いから、そんなもの持ちたくないし、付けたくない」

もはや論外。命懸けのお洒落馬鹿だ。

ちなみに、歩行者への夜間灯火と表示の義務は、空き巣対策としても有効だった。警察官は取り締まり名目で見つけ次第職務質問できるので、夜闇に隠れる夜盗や暴漢はだいぶ減った。

「まったく、なってねえな……」

酔っ払いたちの出で立ちは、軍人として“規則や法令の遵守”を叩き込まれた博人にしてみれば、まったくもって許せない行為であった。

小阪兵長たちが、主力の先頭を誘導して公園内に入ってくる。

そんななか、手回し発電式の懐中電灯で地図を照らしながら、博人は教育隊銀輪係と残りの行程を確認する。

残すところ６行程、約７０ｋｍ／約６時間。道は平坦だが、大・中休止無し。

分隊を確認する。１名が膝の痛みを訴えるものの、行進への影響は軽微。

教育隊は、十数名の落伍者が出ているようだ。カフェインの錠剤が配られているが、新兵たちは疲労困憊で眠気が勝り、士気も低い。

「私の計画は、やはり無茶だったでしょうか？」

博人の視線の先を気にして、教育隊銀輪係はオズオズとした様子で尋ねてきた。

「まさか。この程度の行進ができなくて、戦地に連れていけるもんか。新兵だからと甘やかす必要はありません。それに、この計画を認めたのは大隊付指導官の私です。あと、藤原伍長がそんなだと主力の士気に関わります。」

博人の返答に、教育隊銀輪係はホッと胸を撫で下ろし、気を引き締めなおすように両頬を叩いた。

そうこうしているうちに、主力の最後尾が公園に到着した。
博人はすぐに、号令を発した。

「先遣隊！　装備点検、前進準備！」

17　行進訓練（夜間行進）（後書き）

とは言っても、この平成の世でも、夜は暗いです。
私の住んでいる地域では、２３時を過ぎれば、あちこちの店舗は閉店します。店舗が閉店すると、看板や広告のライトアップは消えます。
道路には街灯が灯っておりますが、それでも街路樹の影や高架の下など暗くて死角になる場所はたくさんあります。
早めのライトオン、そして歩行者さんも恥ずかしがらずに懐中電灯の携行や夜行タスキの着用などするべきではないでしょうか？
自動車教習所で夜間の死角については習ってるはずなのですがね……。
「俺は大丈夫！」↑事故を起こしたのは、大概こんな奴です。
交通だけでなく、治安にもいいと思うのですけどね……お洒落の馬鹿野郎！！！
え？　私ですか？
夜間は徒歩ではあまり出歩きません。自転車か車でライトオン！
徒歩のときは懐中電灯を振ってますね。
感想あれば、よろしくお願いします。

１８　行進訓練（到着そして露営）（前書き）

書置きを載せます。
早いですが、出張間の繋ぎです。
ストックしている話は、まだ少しあります。

１８　行進訓練（到着そして露営）

深夜０３００時、ようやく博人の分隊は行進訓練の目的地である森林公園に到着した。

公園の敷地面積は広く、集結予定地は公園入り口から中にだいぶ入ったところにある広場だ。

博人は公園入り口から小阪兵長らの誘導を立て、目的の広場に前進し、既に慣れた動作で分隊に指示を飛ばした。

まもなくして教育隊の主力が到着し、教育隊長による本訓練の“状況終了”が下達された。

教育隊本部から事後の行動の指示を受けた博人が自分の分隊の集結地域に戻ると、そこには一張りの天幕が完成していた。

大きさからして４人用のそれは、懲罰兵たちの背嚢に入っていた野戦用寝具を組み合わせて作られた仮宿（簡易シェルター）だった。

陸軍の個人用装備品である野戦用寝具は、露営において創意工夫しだいで様々な使い方ができる優れものだ。

寝具と呼ばれているが、正確にはシートと言ったほうがいいだろう。

大きさは２００×２００の正方形で、防水性の高い薄手のシートと、保温性の高い薄型毛布を組み合わせた二重構造になっており、この２つは着脱が可能だ。中央にはマジックテープで開閉可能な部分があり、頭からすっぽり被ってそこから頭を出せばポンチョになり、本来はそうやって装備品や背嚢を身につけたまま防水防寒をしつつ仮眠をとるような使い方をする。

他にも、単純に包まって寝袋として使用してもいいし、地面が固い場所でシートとして広げてもいい。雨具として使用するほか、装備品をくるんで防水処置をしたり、なにかと便利な装備だ。一般的ではないが、戦友の死体をくるむのにも使えると教範には載ってい

た。

今回の露営のように外側の防水シートだけを複数集めて大きなシートを作り、ロープを張って天幕を作ることも可能だ。

ただし、こうした使い方はあまりやらない。

作成と撤収の手間がかかるというのもあるが、使用した野戦用寝具の枚数に対して入れる人員が限られるのである。

今回の簡易天幕は野戦用寝具が8枚使われているが、中に入れるのはせいぜい4人までだろう。

正直言って割に合わない。

警戒任務に就いた際に半数交代勤務の歩哨の休憩所としてはつかえるが、こうした露営で全員が休む時には不向きな気がした。

（そういや、旧軍は自動車化部隊だったから車中泊が当たり前だったらしいな……。手間がかからなかった時代がうらやましいね）

「人員、武器、装具、銀輪車、いずれも異常ありません。現在、2名を歩哨として配置しております」

小坂兵長から現在状況の報告を受け、博人は再度天幕に目を移した。

「よく出来てるけど、これはさすがにいらないんじゃないか？　中は確かに快適だろうが、全員は休めないぞ。」

露営の準備をしろと命じてはいたのだが、さすがにここまでするのはやりすぎな気がした。

日もまたいでしまった現在、あと数時間もすれば出発する予定だ。こんな大げさな仮眠所は必要ない。

小坂兵長は博人の考えていることを読んだのか、すぐに口を開いた。

「実は、先ほど衛生小隊から臨時の収容所を開設してほしいと要望が来まして。新兵の体調不良者が多いそうです。この天幕は、新兵から集めたものです。」

分隊長である博人は、そんな要望は受けていない。よく見ると、ほかの分隊員たちが二張り目を作成中だった。

確かに今回の行進訓練は、自転車による長時間長距離移動の初心者である新兵には過酷なものだったはずだ。体調不良者が出て、収容所が必要にはなるだろう。

しかし、そんな要望があったのなら、先ほどの本部に集合した際にいた衛生小隊長から一言あったはずだ。

「いつの話だ？　俺は何も聞いてないんだが……」

てゆうか、教育隊で起きた事態なんだから教育隊で処置しろよ。

衛生小隊もそういう患者収容場所は自分らで作れよ。

もしかして雑用扱いされてんのか？

「稲葉軍曹が本部に行ってすぐです。衛生小隊の先任下士官殿がこちらに来まして、収容と監視をお願いしたいと。軍曹には後で言っておくとおっしゃったので」

収容と監視？　そこまでやるのか？　先遣隊の任務じゃないだろ。

「そうか。今から確認する。１５分ほどで戻るから、小坂兵長はそれまでに歩哨を残して分隊を集めてくれ。確認調整が出来次第、事後の行動を達する」

「了解」

相互に敬礼をして、博人は衛生小隊の集結地域に向かうのだった。

衛生小隊に確認をとったところ、新兵の二十数人が体調不良を訴えたらしい。おもな症状は筋肉痛だが、中には不眠とストレスで腹を痛めたり頭痛を伴う者もいるようだ。さらには、初めての野宿に対する不安に体調を崩し始める者もいた。

衛生小隊で用意した馬車と天幕では、収容は困難と判断した先任下士官による緊急処置らしい。

だが、何で先遣隊にそんなことをさせるのか？

答えは単純に人員数と練度の問題だった。

今回の訓練の編成は、大きく分けて３つだ。

博人たちの臨時先遣隊、主力の教育隊、衛生小隊を含めた安全管理班。

教育隊の新兵に野戦用寝具を使った天幕作成の技能はないし、管理している下士官は新兵たちの監督に手一杯だ。収容所の作成、収容者の監視までやる余裕はない。本部の将校や上級下士官にそんな雑用をさせるわけにもいかない。

安全管理班は見積もり以上の体調不良者に対応できていないらしい。

結局、ベテランの先輩懲罰兵で編成された先遣隊が支援をすることになった。

「農家出身の奴はいいが、それ以外は体鍛えてないからな。初めての２００?は相当な負担だったようだ……まったくだらしない。見ろよ、あそこのデブ2人とモヤシ。ここ来る前は工場で座り仕事ばっかりだったらしい。すまんけど、衛生兵1人と患者の一部をそっち移すから、面倒みてやってくれ」

衛生小隊の先任下士官からそう言われ、博人はしぶしぶ了承した。程無くして先遣隊集結地域の臨時収容所に、博人は担当の衛生兵と患者の一部をつれて戻ったのだった。

小坂兵長によって分隊を集めた博人は、事後の行動を達した。

「事後の行動を達する。

分隊は、現在地において露営しつつ、衛星小隊の臨時収容所の運営を支援する。

現在地を出発するのは4時間後、０８００。それまで、歩哨とはべつに衛生兵の伝令を1名配置しする。一組長は一組と三組をもって交替で歩哨につけ。伝令は二組で回せ。計画は任せる。残りの者は仮眠をとれ。

帰りの電車は１０００にＦ駅発だ。

状況は終了したが、部隊に帰るまでが訓練だ。最後まで気を抜く

なよ。
以上」

18　行進訓練（到着そして露営）（後書き）

食べること、温まること、そして寝ることは、野戦においてとても重要なことです。

野戦用寝具をいかに使いこなすかが、兵站がままならない自動車を持たない軍隊の体力維持につながります。

19　訓練終了後（前書き）

かな～り、お久しぶりです。
短いですが、どうぞ。

19　訓練終了後

電車に揺られて泥のように眠りこけて、駅についたらまた銀輪車を漕いで、へろへろになりながら博人たちの行進訓練部隊が駐屯地域に到着したのは、つい昨日のことだ。

あのあと、半日程度の仮眠を取って、博人は分隊の装備等の整備は小阪兵長に一任して、整備終了の報告を受けたのはついさっきだ。

その間、博人は作戦・訓練課の事務室で今回の訓練にかかわる報告書をまとめていた。

「大変な事態になっていたようだね」

博人の報告書を読んだ秋山少佐は、椅子に座ったままギョロリと目だけで博人を一瞥すると、報告書を机の上に置いた。

「はい。ですが、教育隊の練度が掌握できました。一般軍籍の我々と違い、彼らはつい1ヶ月も前までただの民間人でしたし、年齢も27という現役の兵卒としてはギリギリの年齢です。しかも、銀輪歩兵科諸元にある行進能力は未だ有していません。訓練指導上の立場として見落としていた私の責任です」

「本気で言ってないだろ」

博人の言葉に、秋山少佐は呆れたため息をついて言った。

「君のことだ。練度不十分は教育隊下士官の練兵の怠慢、そう感じたのじゃないのかね？　大隊付銀輪指導官殿？」

秋山少佐の言葉に、博人は深々とため息をついて答えた。

「それもまあ、確かに感じています。少佐……この部隊は最前線で主力の盾になる部隊ですよね？　主力に足がついていけないようじゃ、どうにもなりません。戦闘も大事ですが、行進を前提とした訓練を教育隊は増やすべきです。戦闘技術はその後かと」

博人の言葉に秋山少佐はお茶を一口啜ると、おもむろに口を開いた。

「そうもいかん。時間も装備も訓練資材も、この部隊には不足している。お前の指導官としての意見は聞いてやるが、聞いてやるくらいしかできん。与えられた条件で、君が出来るベストを尽くしてくれ」

「了解しました。時間がないなりに、尽力いたします」

（そら、そうなるわな）

博人は秋山少佐に敬礼をして、自分の机に戻ろうとしたのだが、

「ああ……ちょっと待て」

秋山少佐に呼び止められた。

なんだろう？　と首を傾げていると、秋山少佐は机の中から一冊のファイルを取り出して博人に手渡した。

「来月、第３師団の機動力調整会議がある。近畿地区防衛を想定した師団管内の各部隊との連携にかかわる戦略会議だ」

「え？　……それって去年、第３師団はやりましたよね？　２年に１回のはずじゃ？」

「第３師団長が今年から年に１回やると決めなすった。しかもだ……懲罰大隊が初めて参加する記念すべき戦略会議だ」

「えええええええええええええっ！！？」

機動力調整会議とは、師・旅団が駐屯する地域において行われる戦略会議で、さまざまな敵情を想定し、各部隊を迅速に展開させる戦術機動を話し合う場である。

各部隊の幕僚や機動にかかわる専門家が集まり、立体地図上に各部隊を模した駒を並べてそれぞれの部隊練度に応じた速度で動かし、戦略戦術をシミュレートするのだが……これが大変面倒くさい。

銀輪機動はもちろんのこと、騎兵や乗馬歩兵の速度や、鉄道の稼働状況、さらには装備や地形・天候、部隊練度やその士気や疲労度、あらゆる要素を考慮して我が部隊の可能行動を見積もり、それに応じて各部隊長や幕僚たちが自分たちの受け持ちを調整しあいながら

行う図上戦。この見積もりの算定が、特に大変なのだ。

だいたい3日がかりで、算定手は基本徹夜。各部隊の算定手は、歩兵部隊なら部隊銀輪指導官がやるのが定番だ。

何より博人の頭を悩ませているのは、彼は近畿地方の土地勘に疎いということである。

一応、兵要地誌は一通り読み漁ってはいるが、大隊以上の大きな部隊が全て目的地に無事たどり着ける経路を、瞬時の判断で選び算定できるほどの理解はないし、資料も不足している。

「まあ、なんだ。機動算定をお前一人でやれとは言わんから、各中隊の銀輪係の誰か1人を副官として連れて行け。お前の人選で文句言うやつがいたら、俺が黙らせる。ベテランなら、第2中隊の船越軍曹なんてどうだ？　鉄道機動にも詳しいし、もと乗馬歩兵だから各種部隊緒元にも詳しいはずだ。伝令も2人までなら認めるから、来週までに調整しておいてくれ。資料収集に外出が必要なら、いつでも許可印くらいくれてやる……って、もうすぐゴールデンウィークだな。時間は十分あるから、頑張りたまえ」

連休（ゴールデンウィーク）、消えた（泣）。

１９　訓練終了後（後書き）

独身軍曹は不憫です。
家庭がないから良いだろ、みたいなノリで休日でもこき使われるのです。

設定資料その1　陸軍軍曹・稲葉　博人（前書き）

とりあえず、稲葉軍曹の設定を纏めておきたいとおもいます。
今後、加筆修正も有り得ます。

設定資料その1　陸軍軍曹・稲葉　博人

中部方面隊人事資料

名前：稲葉　博人
年齢：27（復立21年4月現在）
性別：男性
身長：179
体型：痩せ型、筋肉質
階級：陸軍軍曹
現所属：
　陸軍第2懲罰大隊第1中隊
現役職：
　大隊付銀輪指導官
　第1中隊銀輪係兼第1小隊第3分隊長
軍歴（過去10年）：
　複立12年4月、入隊、第3師団第36歩兵連隊・新隊員教育隊
　複立12年9月、第10旅団第33歩兵大隊配置
　複立15年7月、下士官候補生指定　兵長昇進
　複立16年1月、陸軍第4下士官学校（歩兵科教育中隊）入校
　複立16年6月、同上卒業　伍長昇進
　複立17年4月、初級銀輪特技資格取得
　複立18年7月、上級銀輪特技資格取得
　複立20年4月、軍曹昇進、中級下士官集合教育参加
　複立21年9月、陸軍大学・銀輪機動運用研究室特別研修参加
　複立21年4月、第2懲罰大隊配置、大隊付銀輪指導官等着任
認定特技
　中級歩兵戦技
　上級銀輪

中級機動算定手
初級馬術（乗馬限定）

２０　地理学者と兵要地誌（前書き）

博人がよく利用する兵要地誌とは？　今回は軍人ではなく、学者さんの登場です。

２０　地理学者と兵要地誌

『もしもし、電話代わりました高橋です』

ようやく受話器から聞こえた懐かしい声に、博人は安堵の溜め息をついた。

彼とこうして電話で話すのは久しぶりで、今まで電話口では彼の助手が応対する事が殆どだった。

直接話す必要のないことなら伝言で済むが、今回は直接相談が必要なことだったので、彼がでてくれたことに博人はホッと胸をなで下ろした。

「ご無沙汰しております。地誌調査でお世話になりました、陸軍軍曹の稲葉です」

『陸軍軍曹の……ああ、稲葉軍曹か。久しぶりだね～。何かあった？』

「実は高橋先生にご相談したい事がありまして……」

高橋　春樹は、博人が前の部隊で銀輪係をしていた時にお世話になっていた地理学者で、現在はＮ大学に准教授として所属しながら東海地区の複数の大学で講義をもつ元・従軍学者だ。

３４歳で未だ独身だが、ある事情で懲罰大隊への徴兵を延期され、代わりに旅団の従軍学者として四年間勤めたことで懲罰兵役を免除されたという、博人にしてみれば羨ましい経歴の持ち主だ。

第１０旅団の情報部と共に兵要地誌の作成に関与し、東海地区防衛の戦略立案の基礎に大きく貢献し、さらには各方面隊の兵要地誌作成における要点と新基準を確立したとして陸軍参謀総長からも表彰されるなどの華々しい経歴を持っている。

そのまま中央の陸軍大学の教授職にも就けたのだが、これまたある事情から、母校のＮ大学に戻ってしまい、現在の地位に至る。

「高橋先生の知り合いで、S県内で陸軍に協力をお願いできる学者さん、誰か紹介してもらえませんか？」

『……S県？』

博人は高橋に現在の自身の所属と地位について説明し、さらに機動力調整会議に向けて県内はおろか周辺地域への土地勘が不足していることについても話した。

「というわけで、この地方の土地勘、特に銀輪機動に影響する問題に詳しい人の協力を得たいんです。とりあえず部隊としてではなく、個人的にですが」

機動力調整会議がなくても、博人は今、大隊付銀輪指導官の仕事として、駐屯地域周辺における銀輪機動にかかわる地誌調査も行っている。遠からずこうした支援者は必要だった。

博人や各中隊銀輪係が銀輪機動による行進計画を立てる場合、それは地図や道路図と気象情報、鉄道機動も併用すれば路線図や時刻表といった資料との睨み合いになる。有事であれば、さらにこれらに彼我の状況や作戦の特性（兵員の練度、武装、士気、健康状態の他、敵の勢力や警戒に伴う危険地域、災害時通行困難予想地域等）が絡み、それらの情報から許される限りの時間で行進計画を立案、又は上層部の作戦立案に銀輪歩兵の立場から意見を具申していくのが博人たちの仕事だ。

そうした計画作成において博人が最も信頼している情報源が、“兵要地誌”である。

“地誌”とは、気候・自然・民族・風習・物産……等々、総合的にその土地を記述するもので、地理学の基礎であり、一大分野であり、その作成において何をどうやって捉え記述するかが現在でも続く大きな課題である。

そんな中で、土地や地域を戦略的価値という軍事的視点で捉え、総合的に記述されたものが“兵要地誌”で、これの作成は、陸軍大学の研究室や、各方面隊や師団・旅団の情報部やお抱えの従軍学者

が主体となって行っている。
　ただし、こうした兵要地誌に記される地域事情は時間とともに変化する。博人や陸軍が所有する研究データは数年で古いデータとなってしまうため、博人にしてみれば現在進行形で研究を進める者の協力が必要不可欠だった。

『ああ、それだったら……O女大で僕の教え子が助教をしていたな。もしかしたら彼女の研究室に、軍曹の役に立つ研究をしている学生がいるかもしれないね』
「本当ですか！？」
『ああ。すぐにこちらから連絡してみるよ。都合のいい日はあるかな？』
「連休中とか、大丈夫ですかね？」
『う～ん……聞いてみるよ。向こうの都合が付いたら連絡するよ』
「ありがとうございます！」
　高橋の快い返事に、博人は無意識のうちにガッツポーズをとっていた。

　さてと……じゃあ、休日外出申請しときますか。

20　地理学者と兵要地誌（後書き）

一介の陸軍下士官の割には、稲葉軍曹はかなりの特権を与えられていたりします。

あらすじ通りの、“平凡”ではないな……。

21　女性学者（前書き）

超久しぶりの更新です。リハビリ兼ねてます。
内容が内容だけに、幾度も書いては消しての連続でした。
女性の読者の方（いるのか？）には快い内容ではないと思いますが、そういう時代……というか別次元というか、とりあえずフィクションですので、どうか御容赦いただけますと幸いです。

21　女性学者

「あのぉ、軍曹？　俺たち浮いてません？　私服にしたほうが良かったんじゃ？」

「何を言ってる。軍人の外出は軍服って決まってんだ。それに、この格好は身分証明も兼ねてるから、こういう場所に来るには何かと都合が良いんだよ」

「でも、視線が……」

「堂々としてろ」

高橋に紹介された地理学者に会うべく、博人は小阪兵長を伴いＯ女子大学を訪れていた。

大学の敷地内は若い女子学生たちで賑わっていて、そんな中を厳めしい軍服姿の軍人が歩いていれば良い意味でも悪い意味でも目を引くのは当然だった。ましてや博人は軍刀を提げているので距離を置かれる傾向もある。

本当なら博人は単身でここを訪れたいところだったのだが、残念ながら将校を除く懲罰部隊の軍人の外出は二人一組（バディ）での行動が原則とされていた。

ちなみに懲罰兵は原則外出できない。通院や実家の不幸といった特例はあるが、その場合は要員が付き添う引率外出とされている。支給品だけでは間に合わず何か外に入用の物があれば、分隊長を通じて小隊先任下士官と協議のうえで通販を利用することになったりする。

「それにしても軍曹。彼女たちは帰省しないんですかね？」

ゴールデンウィークという連休であるにも関わらず人が多い。

博人や小阪兵長であれば１週間程度も連休をもらえば実家にでも帰って親孝行の一つでもしつつノンビリ過ごしたいところだが、

「帰省できないんだよ。全員ってわけではないけど、交通費を捻出できるだけの余裕がないんだ」

遠方からこの女子大に進学した学生の殆どは、学費と生活費だけで手いっぱいだったりするのだ。とくに働いているわけではないから、親の仕送りとバイト代でギリギリの生活の中で学問に励んでいるのが殆どで、実家に帰る余裕なんてあるわけがない。

そもそも祖父が現役だった頃ならともかく、今の時代は女性が学問を志し社会進出を目指すなど非生産的だと揶揄される傾向にあり、家族の理解やよほどの熱意がないと大学に進学なんてあり得ない。

否、国立の女子大であれば話は別だ。ただしその場合、一般教養だけでなく家政科目にも重点を置き、華道や茶道といったお稽古事を通じて、古き良き時代の“女らしさ”を教育することでエリートの伴侶になるための花嫁修業をする場である。良妻賢母として家庭に収まる女性の育成を前提としており、社会進出には程遠い。

一方で私立の女子大は、国立のそれより高い水準の女性教育がなされる女学校であるか、反対に社会進出を前提にした教育を行う二種類がある。

このO女子大は後者に分類されており、社会進出に向けた専門性の高い教育や研究が行われている。

だがそのせいで、国からはあまり支援を受けられず、学校も学生も運営から生活まで大きな負担を強いられている。

ちなみに共学の場合『女子学部』などというものがあり、結局のところ女子大と教育の内容は変わらなかったりする。

この手の学校がこのように扱われる理由には、勤労農村制度が大きく影響している。

27歳までに結婚しなければ東北の寒村で農業従事、結婚しても3年以内には子供を産め、ではせっかく社会進出のために学問をしても数年で家庭に収まってしまうために活躍できること自体が難しいのだ。

そうはいっても、彼女たちのために社会制度を整えれば半世紀前

の働いて結婚しない、出産を望まない又は望めない女性を容認してしまい、国家繁栄の3原則を揺るがしかねない。

倫理的に問題ありと世界から非難されることもあるが、そもそも電力も燃料も少なく生活基盤も退化していくこの時代に、性別の違いによる不平等を無くす余裕があるだろうか？　機械や社会制度で男女の性差を埋める余裕が、この国にはもうないのである。

もちろん、そんな環境や待遇にも負けずに頑張る女性もいるにはいるし、女性にしかできない仕事も存在する。利潤を追求する組織に属するなら、男女の別なく能力さえあれば出世は出来る。一般的な仕事でも……特に大きな農場は収穫期などは人手不足だから男女問わず求人があったりするので、選り好みさえしなければ働き口はいくらでも見つかる。

それでも殆どの職場で基盤となる労働力は男性になってしまう。そうした事情から、憲法では既に男女の平等は謳われていない。現実的に無理なのだ。

非常時において倫理・道徳を捨て、理に従え

陸軍大臣の言葉だったと思うが、この国の歩み方は見ていてこの言葉に沿っている気がする。

結局のところ国民は、個人の幸せより全体の繁栄を優先し、富国強兵を実現しなければならない。

国力の増強において理にかなった行動といえば、とにかく人口という労働力の増加こそが重要なのだ。女性は子を産んでこそ、富国強兵に寄与できるのである。

表立って言われることはあまりないが、だからこそ婚期を遅らせたり、最悪それを逃したりという事態に繋がる若い女性の社会進出の推進は“この現代”において反社会的活動なのである。

どうしても働きたいというのであれば、それらを終えた後にする

べきだろう。
出産や育児を終えたママさんたちが集まり構成され、国も男性の手も借りずに女性だけで完結された企業組織も存在しているのだから。そういった意欲や能力のある者だけが頑張れば良いだけの話である。

指定された講堂の前に着くと案内役の学生が待っていて、研究室まで案内してくれた。
「こ、ここ、こちらです。どうぞ」
軍服の男二人にプレッシャーを感じているのか、話す時に微妙に目線をそらすのが気になったが……仕方ない。
「先生。稲葉軍曹がいらっしゃいました」
学生に促されて室内に入ると、部屋の中央には県内全域を模した大きな砂盤（ジオラマ）があり、先端に電磁石のついた指示棒で盤面の道路の馬車の模型を動かしながら渋い顔をしている３０半ばくらいに見える女性が立っていた。
彼女は博人たちに気づくと砂盤を睨むのをやめて居住まいを正すと、小さく一礼した。
「よくいらっしゃいました。高橋先生の後輩で、ここで助教授をしております宮野と申します」
つい癖で敬礼をしてしまうのを何とか堪えて、博人と小阪兵長は脱帽して宮野助教に一礼する。
「はじめまして。陸軍第２懲罰大隊所属、軍曹の稲葉と申します。こちらは私の副官の小阪兵長であります」
「どうぞコチラへお掛けください」
宮野助教に勧められて部屋の隅の応接スペースのテーブルに着くと、彼女は案内役の学生にお茶を用意させながら一言二言何か話した後、テーブルを挟んで博人たちの向かいに座った。
学生が一礼して部屋を出ると、早速彼女のほうから口を開いた。
「お話は高橋先生から伺っております。稲葉軍曹は部隊の機動に関

わる重要な役職に就かれているそうで、県内を中心とした土地勘や道路事情、特に自転車の運用に詳しい学者の協力を得たい……と」

話が早いな、と博人は高橋の事前の手回しに感心していた。

「正確には、現在進行形で調査や研究をしている者の協力を得たいところです。ですが、陸軍や懲罰大隊にではなく、私個人に協力していただくという形になります。部隊の従軍学者の受け入れに関わる人事権を私は持っていませんので。ああ、ですが……部隊の作戦・訓練課から予算が出てますので、ささやかではありますが謝礼はご用意しております。それから、こちらの人事課に確認したことですが、協力してくださる研究者個人には一定期間以上の協力で従軍実績が保障されるそうです。」

“従軍実績”と聞いて、宮野助教の目の色が一瞬だけ変わった様に見えた。

従軍実績とは、民間の企業または個人が軍に従い行動を共にし、軍の作戦行動や訓練に貢献したことの証明である。そしてそれは国家への貢献という名誉を伴う。

この女子大にしてみれば軍と国家への貢献という実績は、彼女らの目指す社会進出に向けた大きな宣伝材料となるだろう。ただその実績は協力してくれた個人のものであり、大学そのものの実績にはならないが。

宮野助教はしばらく思案顔をしていたが、やがて一息ついておもむろに口を開いた。

「わかりました。私の受け持つ研究室の中に『道路交通』をテーマに研究をしている“学生”がおります。それでよろしければ、お会いしますか？」

「学生……ですか？　研究者ではなく」

「はい」

てっきり学内の要員である研究者を紹介してもらいたかった博人だが、勤めて冷静に考えてみる。

（アリかもしれんな）

宮野助教はその学生の研究テーマが『道路交通』だと言った。商品の流れを見る商用的な『流通』ではなく、単純に道路を行き交う『道路交通』ならば、部隊という人馬や車両の集団を動かすことを考えれば非常に有用な研究……かもしれない。

もしかしたら研究テーマの名称に惑わされた博人の見当違いかも知れないが、その心配はないと見ていいだろう。何故なら彼女は博人の部隊での役割を知った上でその学生を薦めているのだから。

「ぜひ、会わせてください」

「では、お呼びしますね。少しお時間かかるかも知れませんが、よろしいですか？」

「はい」

博人が首肯すると、宮野助教はテーブルの隅に置いてあったハンドベルを手に取り鳴らし、外で控えていたのか先ほどの学生がドアを開けて入ってきた。

「莉奈さんを呼んでちょうだい。多分、研究室にいるわ」

一礼して去る学生の背中を見送りながら、博人はふと、今更ながらに気づいた。

個人的に、とは言いながらも結局は陸軍に従軍してもらうわけで……当然、懲罰大隊の駐屯地域にも通ってもらうことにもなるだろう。場合によっては外来宿舎に宿泊してもらうことにもなるかもしれない。

一般軍人の博人たち下士官のような要員はともかく、懲罰兵は４年間ろくに若い女性と接触する機会に恵まれない男たちである。そんな男たちのいる場所に若い女性が通うというのは、どんな影響があるのか全く予想ができない。

（若い娘さんを駐屯地にいれても、大丈夫なんかな？）

しかしそんな不安は、この後すぐに打ち消されてしまうのだった。

22　女子学生（前書き）

こういう女子大生って……アリですかね？

22　女子学生

（そうきたか……）

宮野助教授が推薦する学生・末広　莉奈と対面した博人と小阪兵長は驚きを隠せず、しばらく言葉を失っていた。

「期待させちゃったかしら？　ごめんなさいね、こんなオバサンで」

研究室のドアを開けて入ってきたのは、宮野助教授と同年代……否、もしかするとそれよりも年上かもしれない、少しばかりやつれた女性だった。

世間一般がイメージする“女子大生”なんて年齢ではない。身だしなみに気を使っているし背筋もピンと伸びているおかげでそれなりに綺麗めな方ではあるが、お世辞にも若くはない。

しばらく何と言葉を発してよいかわからず呆然としていた博人だが、末広女史がテーブルの向いに座ると我に返ってまずは挨拶をして、宮野助教授も交えながら事情を説明し、協力を願い出た。

末広女史はにこやかに二つ返事で了承し、呆気にとられるほどのトントン拍子で協力の確約を得ることができた。

そして話が纏まると、ちょっとした世間話がてらに末広女史の身の上話を聞かされることとなってしまった。

彼女は去年、大学院に上がったばかりだという。

大学に入学したのは２０代の半ばで、既に結婚・出産を終えた３児の母だと言う。

高校を卒業してすぐに親戚の紹介によって退役間近の海軍将校と結婚し、出産と育児を終えてから進学したという。

子供もある程度大きくなったところで夫が退役し、家や子供のことは任せて心置きなく進学、そして夢だった学者になる道を歩み始

めたのだそうだ。

彼女のようなケースは博人も聞いたことがある。特に軍に属している者ならば、耳にする機会も多い。

老年の高級将校と義務教育を終えて間もない若い女性が結婚する例は、最近それとなく増えている。

軍籍に属する男子は懲罰大隊制度の対象外だ。いつ結婚するのも自由であるし、生涯独身でも特にお咎めもない。

そうやって一般的な結婚適齢期を過ぎても独身でい続けた軍人のうち、特にエリートまで上り詰めた将校たちには退役後に使い切れないだけの蓄財を持っている者が多く、さらに年金まであり、悠々自適な老後が保障されている。

そうした退役将校たちの老後は何かしらの趣味に時間と金を費やすものだが、なかには特に趣味もなくやることのなくなった老後で独り身の寂しさに耐えられない者も多いという。

現役時代は忙しく駆けずり回り、あちこちに転勤を繰り返し、多くの部下の命を背負う責任の重圧に耐え、独り身でも寂しさを感じる余裕もなかった高級将校たちが、退役した途端に時間と金を持て余してしまうのだ。

生活に張り合いがなくなったことで自殺者まで出始めたため、一時期は社会問題にもなってしまった。

国勤に青春を捧げた者の末路としてはあまりにも酷いとして、国はさまざまな対策を打ち出したがあまり芳しくなかった。

しかし何時からか、そんな彼らの時間や経済的余裕に目を付けた女性たちがいた。

彼女たちの考えたライフスタイルはこうだ。

結婚可能な年齢になると同時に結婚し、早期のうちに出産を済ませ、頃合を見て退役した夫に育児を任せて進学・就職して社会に出

るというものだった。

進学面で同年代に置いてきぼりをくらいかねないが、一度社会に出れば結婚・妊娠・出産・育児という突発性のイベントや雇用する側にとっての面倒が少ない彼女たちはキャリアアップがしやすくなる。

夫は経済的にも裕福で人生経験豊富な余裕ある大人なのだから学費には困らないし、社会に出てから挫折しても何とかなったりする。退役後はやることもない退屈な老後生活だったのが、育児のお陰で生活に張り合いが出て積極的に家事をするらしく、妻も安心して学問にも仕事にも打ち込めるのだそうだ。

ここまで割り切った考えのできる上昇志向のある女性、自分の祖父ほども年上の男性との結婚（ましてや子供まで作るとか……）に抵抗のない女性はほんの一握りでしかないが、彼女らの要望を満たす退役間近の独身の高級将校も軍でも一握りだ。

需要と供給は均衡し、うまくマッチングできたのは言うまでもない。

「なんつーか……衝撃的でしたね」

「噂には聞いてたけど、アレの実物見るのは初めてだったわ……」

6頭立ての乗り合いの大型馬車に乗り込んだ博人と小阪兵長は、空いていた一番後ろの席に座るなりボンヤリとこぼした。

サスペンションがあまり効かない馬車のようで、後部車輪の車軸の上の席に座っているお陰で揺れが強い。シートは新品（最近流行のデザイン）で座り心地はいいのだが、車体は古いものをそのまま使っているようだ。

外はすっかり朱に染まっていて、車内の電球は車輪に連動した発電装置に依存しているのか、微弱な電源ゆえにあまり明るいものではない。

地誌の参考にと末広女史の論文のコピーを貰ったので読もうと思ったのだが、揺れる座席と薄暗い手元に乗り物酔いの初期症状を覚えて、すぐに止めた。

「どのくらいで着く？」

ふと博人は隣の副官に問うた。

小阪兵長の実家が近傍にあるとのことで、今日はそこに泊まる予定だ。

「えーと……３０分くらいですかね。あ……でも、この時間帯だと１回ターミナルよって馬を付け替えて、もう少し遅くなるかもしれません」

「まぁ、ノンビリ行こうか……」

こうして地理学者（正確には学生だけど）の協力を得ることに成功した博人ではあったが、機動力調整会議に向けた彼の任務はまだ始まったばかりである。

22　女子学生（後書き）

結婚相手としての退役前高級将校のメリット

（注※一般に“高級将校”とは少将以上を意味するが、階級や職責による区別をする軍と待遇で区別する民間（お見合い等斡旋業者）では認識が異なる場合がある）

・経済的に安定（独身のままで退役した場合、共済年金＋退役賞与＋現役の間に使う暇もなかったが故の潤沢な貯蓄により、余程の道楽でもない限り使い切れない…らしい）

・老年ゆえの余裕（人にもよるけど……）

・退役後、持て余す時間を家事・育児に傾注できる。

・所属していた部署にもよるが、老年のわりに体力があるので力仕事にも強い。

23　スポーツ選手（前書き）

超お久しぶりです。

23　スポーツ選手

『平時ニ於イテ身体ノ鍛錬ヲ生業トスル者ハ、其ノ鍛エタ肉体ト強靭ナ体力及ビ練磨サレタ技能ヲ社会ニ還元シナケレバナラナイ』（職業法第〇〇条●項）

身体の鍛錬を生業とする者といえば、なんだろう？

まず公務員でいえば、国家や社会の危急の折にいち早く駆けつけ、国民の負託に応えて危険な任務をこなす軍隊・警察・消防といったところだろう。

民間で言えば、警備員だろうか？

平時から鍛錬をされた彼らの肉体と体力、技能は、“富国”を実現させる基盤である生産者の平和と安全を守るためにある“強兵”の資本である。

富国強兵にも寄与しない職業は“無為徒食”であるとして扱うのがこの国の方針である。

さて、平時において身体を鍛えることを生業とする職業は実はもう一つある。

それは“スポーツ選手”である。

小坂家は牧場に隣接した住宅地にあった。ここらの住人の殆どが牧場の従業員らしい。

懐中電灯の灯りを頼りに歩いていると、住宅地の中の小さな公園で野球のユニフォームに身を包み一心不乱にバットを振っている青年がいた。兵長の弟だそうだ。

「修二、帰ったぞ！」

小阪兵長は彼を見つけると、そう声をかけた。
「おー、兄貴、お帰……っ！　お疲れ様です！！」
彼は兄の帰りに気づいて素振りを止めてこちらに向き直ると、同時に博人の存在に気づいて目を見開き、大慌てで敬礼した。
博人は答礼を返しつつも、彼の立ち振る舞いからすぐにその身分を察した。
「予備役か？」
「はい！　第４９歩兵大隊第３中隊所属、小阪　修二・予備役１等兵であります！　現在は『猛龍組』の２軍で、外野手をしております！」
「お疲れ様。頑張れよ」
博人は一言だけ労いの言葉を残して、兵長とその場を後にした。

この国には専業スポーツ選手はいない。
賛否は大きく分かれるが、専業スポーツ選手や芸能人が増える、あるいはそれを目指すものが増えるのは国力の衰退に繋がるとして、国はこうした職業に高い税金や一定の義務を負わせることで、志望者を減らすようにしている。
博人が祖父に聞いた話では、昔はあるチームに所属する野球選手等は給料が貰えたそうだ。そんな選手に憧れて、そうした選手になろうとする若者も多かったらしい。だが、全員がなれるわけではない。スポーツで生計を立てられるのは、才能のある一握りだけだった。にも関わらず、現実を見ず自己分析も出来ず、夢を追う若者は後を絶たない。
スポーツに限った話ではないが、スターに憧れてそれを目指すあまり家業を蔑ろにし、勉学を止め、労働に従事することもなく、もっとも力ある青春時代を無為に終える若者が多いことは公にならない社会問題の一つであった。彼らは平時にあらゆる支援を受けながら身体の鍛錬に明け暮れ、しかしそれを自己実現や自身の利益のた

めに行い社会に還元しないのである。これこそ無為徒食というものであるし、挙句夢を掴めなければ無意味な人生そのものであり、国にしてみれば若い時間と力という労働力・生産力の浪費でしかなかった。

そのため、職業法にあの条文が加えられた。

しかし、そうは言ったところでスポーツ振興の観点から見れば、興行としてのプロスポーツそのものを廃止するわけにはいかない。ならば、彼らの鍛えられた肉体と強靭な体力、練磨された技能を国家と社会に還元する機会を与えればいいのだ。

こうして、彼らは国によって陸軍の予備役として登録された。有事はもちろんのこと年間４０日間の訓練に召集に応じる義務を負うことで、彼らには国家危急の事態に備えた肉体の鍛錬を名目として平時は専業スポーツ選手としての活動が認められることとなったのだ。

既に土砂災害や地震などの被災地での瓦礫除去などで彼らは大きく活躍しており、種目によってはオフシーズンに警備任務を与えたりと、その運用の幅は広がっている。

ただし、身体の鍛錬を生業とする者と言っても例外はいくつか存在する。体力や健康の維持増進を目的とするスポーツクラブの指導者等はこの限りではない。

小阪兵長の弟が予備役になったのは、つい最近らしい。今日は休暇で帰省しているとのことだった。

幼少のころから兄弟ともに野球が好きで、中学卒業後は家業を手伝いながらある球団が運営するスポーツクラブに通い、いつかは選手になろうと夢見ていたそうだ。

しかし、兵長は途中で肩を故障して、それを機に夢を諦めて軍隊に入隊した。

クラブのコーチからはリハビリ次第でなんとかなると言われたそうだが、兵長はハンデを克服している間に同期たちから大きく遅れを取ること、仮にリハビリに成功して選手になれても後遺症を引きずり続けて長く続かない可能性もあること、そもそも自分が凡才に過ぎないことにも気づいていて、スッパリとグローブを置いたのだった。

家業ではなく軍隊を志望したのは、牧場仕事が嫌だったからだそうだ。家業といっても、小坂家は牧場の従業員でしかないので継ぐようなものでもなかったが。

小坂家の家人に一通りの挨拶を済ませ、博人は小阪兵長の部屋に通された。

軍服の詰襟のフックを外し、フゥッと一息つくと、博人は背嚢から部屋着用に持ってきたジャージを取り出した。

軍刀を吊るした弾帯を外そうとバックルに手をかけたところで、部屋の襖が開いた。そこには、先ほど挨拶を済ませたばかりの小阪兵長の母親がいた。

「軍曹さん。夕食までまだ時間がありますので、先にお風呂を済ませてきてください。修一、修二と一緒に銭湯まで案内してらっしゃい」

（銭湯か……そういや、まともな風呂に入るの、けっこう久々かも）

23　スポーツ選手（後書き）

プロ（一軍）になれなかった若者が消費（浪費）した時間（青春）と若さ（体力＝生産力）を勿体無いと思うのは、私だけでしょうか？

畑の一つでも耕せよ、と。

職業・スポーツ選手を否定したいわけではないのですが、居酒屋のテレビで野球中継を見ると、『コイツラ、遊んで金貰っててズルい』とか呟いていた子供時代を思い出したりします。

その感覚は今も残っていて、私にとってスポーツは、娯楽が健康・体力の維持増進、自己実現の手段でしかなく、職業になるのが疑問だったりします。

勿論、甘い世界ではないのは重々承知なのですが、プロスポーツに興味がない自分にはどうでも良かったりします。

24　頭髪（前書き）

お久しぶりです。
なんとなく書きたくなって書きました。

24　頭髪

「兵長。ちょっと寄ってきていいか？　俺は後から行く」
銭湯の駐輪場に小坂家から借りた自転車を停め、小阪兄弟の先導で銭湯の入り口まで向かう途中にあるものを見つけた博人は足を止めて、そのあるものを指差した。
「言ってくだされば、山村にでも頼みましたのに」
博人の指す赤、青、白のストライプ模様の提灯が掲げられた店舗を見て、小阪兵長は小さく肩をすくめながら小隊の懲罰兵の名前を口にした。
「それはまたの機会にするよ。たまには、ちゃんとしたところで“切り”たいんだよ」
そう言って博人は、理髪店の暖簾をくぐった。

「いらっしゃいませ。どんな感じになさいますか？」
「この写真のように頼む。側面は３ｍｍ、上は６ｍｍで自然な感じで」
「へい。洗髪はいかがしますか？」
「そこの銭湯で流すからいい。顔剃りだけ頼む」

「さっぱりしましたね、軍曹」
髪を洗って湯に入ると、先に来ていた小阪兵長が蒸風呂（サウナ）から出てきたところだった。弟のほうは水風呂につかりながら、砂時計をひっくり返している。兵長によれば、弟は毎回、蒸し風呂と水風呂を交互に入るのを3回くらいしているらしい。
「すごいな、ここ。蒸し風呂なんてあるんだな」
「大昔は、ここら辺にあったレジャー施設の一部だったそうです」

「ほー……それがいまや、牧場か」
種類にもよるが、蒸風呂は贅沢品だ。だがここいらの牧場周辺では、旧時代の遺産という形で今も存続しているらしい。そういえば、大きな牧場の周辺にはこういったタイプの大浴場が多い。
「兵長は野球をやってたそうだが、昔から坊主なのか？」
ザラザラと触り心地の新鮮な自分の頭の感触を確かめながら、博人は何気なく湯船に漬かる副官に問うた。
「まぁ、そうですね。でも野球がどうとかじゃなくて、ほら、うちの実家も近所も牧場で動物を扱うじゃないですか？　衛生上は短いほうがいいんで」
「なるほど……だから理髪店も需要があるわけだ」

髪なんか自分で切ればいいという人もいるが、高価なバリカンを所有している家は少ない。貸してくれる家も稀だ。不特定多数が使うとなれば衛生面で不安なため、よほど親しい間柄でもなければ人の体に接触する機械の貸し借りはなかなかしない。
結果として、各自が鋏でなんとかするか、きちんとした営業資格を持って衛生面の管理を徹底した業者に頼むしかない。懐は痛いだろうが、多くの場合は後者をとるものが多い。
だから節約のためにちょっとした調髪なら鋏と櫛を用いて家族で済ませ、理髪店の利用は数ヶ月に1回といった具合で家計と相談しつつするのが一般的だが、昔の兵長のように家庭や職業上の理由から頻繁に利用するものも多い。

そして、軍隊でも職業上の理由から基本的に短髪が推奨されている。
威容を保つため、強く見せるため、などと言われるが違う。統制の美の観点から、ただ短くするだけで統一できる、などという安易なものでもない。見た目なんてものは理由になんかならない。
まず第一の理由は、予防衛生の観点からだ。一度戦争が始まり、

前線に出れば、数週間から数ヶ月は風呂はおろか水浴びすらできなくなる。配置場所が山中の草木の中なら、さらに衛生状態が悪い。そんな状況下での長髪はノミやシラミの巣窟となってしまう可能性がある。

いつ出動がかかるかもわからず、いちいち出動前に散髪するわけにもいかないため、平時における即応態勢の維持の観点から軍人の頭髪は常に短くしておかなければならない。

戦闘職ならではの理由もある。歩兵職種は近接戦闘が主任務なのだから、格闘戦において髪を掴まれて不覚を取った例もある。毒ガス攻撃を受けた際には、防毒マスクの面体の縁に髪を挟んで機密性が阻害される懸念もある。

ただし短過ぎるのも問題で、鉄帽内の小さな金具で頭皮を傷めるのはよく聞く話だ。

そのため、駐屯地や各部隊ごとに具体的な頭髪規定が定められている。

博人が前に所属していた部隊では『額上部から下は２ｍｍ以上９ｍｍ以下、上は３ｍｍ以上２０ｍｍ以下、モミアゲは耳の付け根の半ば』と細かく規定されていたが、懲罰大隊では『０．５ｍｍ以上１２ｍｍ以下』と随分とシンプルだ。

どういう根拠でこう定めたのかは分からないが、客観的な基準を設けて白黒付けてくれるのは指導する側もされる側にも有り難い。部隊長や指揮官の主観に任せれば、個人的な好き嫌いでイチャモンがつけられるのだから、こうした明確な規定は何が正当で何が不当な指導であるのかをハッキリさせられる。規律の厳守が強く求められる組織において、明確な定義があるというのは統率が取りやすく揉め事の収束も楽になる。

さらに罰則を設ければ、その強制力はいよいよ強くなる。

違反すればまず口頭注意、それでも従わない場合は課外清掃活動のようなペナルティが与えられる。それでも改善されないのであれば軽処分すら受けることもある。

たかが髪型ぐらいで、と思うかもしれないが、いついかなる時にでも物資の充足も衛生環境も整わない環境に置かれても良いように、一人の不潔が周囲に及ぼす悪影響の可能性は局限しなければならない。

ただ、それでも従わない者もいる。理由としては色々な言い分があるが、博人が一番笑った理由は『ヤクザみたいで嫌、みっともない』というやつだが、短髪の暴力団構成員が主流だったのは１００年も昔の『昭和』の時代だ。今時の暴力団なら髪が短くないどころか、金持ってるアピールで染めてる奴もいて派手なのだから、むしろ短いほうがヤクザに見えない。大昔にヒットした仁侠映画が今でも根強い人気を得て上映されており、たとえ映画の内容は殆ど知らなくともインパクトのあるポスターや情報誌からそうした先入観を刷り込まれた者が多いようだ。

それでも、彼らの感覚としてある『単純に恐い』『ダサい』というのは何となくわかる。お見合いがそれで破談になった、女が寄ってこない、子供が恐がる、なんていう悲しい事例を聞いたことはある。だが、そういう場合のために許可を得れば隊外でのカツラの着用が認められるので、そうした小道具を利用すればいいだけの話だ。お洒落を地毛に拘る必要なんてないだろう。嫌なら軍を辞めれば良い。それに博人は自身の職業に少なからず誇りを持っているので、一目で軍人と分かるのならば、慕われようが恐れられようが誇らしいくらいだ。

もちろん、頭髪規定にも例外があって、たとえば諜報活動を主任務とするような兵種は一般人に紛れる際に一目で軍人とわかる髪形は任務に支障をきたす。そうした隊員については、部隊長の許可を得れば頭髪の自由が許されている。

「そういや、山村は理容師だったのか？」

博人は散髪前に小阪兵長から聞いた懲罰兵の名前を思い出した。

たしか博人とは別の分隊員だったと思う。

少し前に当直に就いた際、課業後に懲罰兵の廠舎で鋏と櫛だけで器用に隊員たちの髪を切っていた男を見たような気がするが、そいつだろうか？　大隊本部の机にいることが多い博人は、中隊の人員については疎かった。

「らしいです。専門学校を出て商売始めたものの、立地が悪くて儲からずに、徴集と同時に店を畳んだそうです。腕はなかなかいいですよ」

「それだったら、退役後にどっかの駐屯地の近くで理髪店でもやったらいいかもな」

手に職がある者は、何であれ、どこに行こうと、いつか重宝するものだ。

大昔と違って、これからはあらゆる技能が機械から人の手へ、利器を失う一般人から専門家である職人の手に帰っていくはずなのだから。

24　頭髪（後書き）

そういえば、野球部が坊主頭や短髪に拘る理由って、何だろう？戦地の兵隊じゃあるまいし、ずっとヘルメットかぶるわけでもなかろうに？

坊主頭や短髪ってダサいだろうか？

ヤクザみたいとかいう人いるけど、今時短髪のヤクザいないでしょ？　某大ヒット仁侠映画のイメージを引きずり続けてるのでは？

ちなみに、結婚式あったので一年ぶりくらいに床屋で髪切りました。

ここ一年ほど、自前のバリカンで坊主頭に刈ってました。

楽で良いです。そして刈り立てすぐの時期に●●●なお店に行くと、店員のお姉さんたちが楽しそうに触るので……気持ち良かったり。

そういえば、学生のとき納得いかなかったのが、髪の長さ同じなのに注意される人とされない人がいて、基準示せ！とか思った。職場でもたまに……。

女性だと髪色とかスカートの長さとかで、そういうのないですか？

髪型に関わらず、目的があって服装・容儀に何らかの規制を科すなら、指導的立場の人間の主観（好き嫌い）に任せず、明確な客観的基準で示して欲しいものです。

25　牧場

牧場と聞いて、どんな風景を思い浮かべるだろう？
まず目に浮かぶのは、広い草原だろう。
しかし平野部はとっくに人間の生活圏であり、家畜を大量に養うに足る広い草原はなかなか確保できない。まさか家畜のために人間が土地を離れるわけにもいかない。
そうなると、山林を切り開いてでもそうした土地を確保するしかないだろう。
しかし、圧倒的な機械力で木々をなぎ倒し、地面を掘り返すことが出来たのは大昔の話だ。今同じことをするとなれば、大鎌で草を刈り、鋸で樹木を切り倒し、農耕馬で牽いて根を抜き、整地し、石を拾い運び、とんでもない労力がかかるだろう。
ところがこの国が最も景気が良かった頃、大昔に圧倒的な機械力をもって整地され、十分な広さを持ちながら人間が居住する事なく、山の中にポッカリと青々と芝を生い茂らせた土地があった。
それはただ広い土地が必要な娯楽の為に山を切り開いて作られた土地だと、博人は亡祖父から聞いていた。
人が住むわけでもなく、家畜を放牧するでもない、畑として耕すでもなく、ただ娯楽のためだけに切り開かれた無為な土地が、狭い国土の中に次々と作られようとした時期があったのだそうだ。

厚手の皮手袋で有刺鉄線を握り締めて、打ち込まれたばかりの新しい杭に巻きつけていく。
防御を想定した築城訓練で何度もやった事だが、杭と杭の間でこれを弛みがないようにキンキンに張りつつ巻き絞めるのは一苦労だ。ましてや、不安定な脚立に乗ってこれをやるのは初めてで、思うようにいかない。

普段の訓練なら地面から１m程度の高さの金属製の杭を使い３～４線張るが、博人の目の前にあるのは２メートル程度の高さの木杭で、８線を張っている。馬が絶対に飛び越えられないようにとのことだった。

ちなみに、まだ張り終えていない部分には、設置も撤収も手軽な蛇腹鉄条網３巻をピラミッド状に重ねて伸ばし、一時的に閉塞している。

「そろそろ、中休止にしようか」

牧柵班の班長の声がして、博人はホォッと息をつきながら脚立から飛び降りた。

休暇中の宿代と食費を浮かせるため、博人は今日から牧場の組合が運営する寮に短期間登録で入ることにした。労働時間は４時間／日の契約で午前中だけ働いて、空いた時間は本でも読みながら自由に過ごすつもりだ。

出稼ぎ労働者向けの寮で、４畳半の完全個室、４時間／日の労働で家賃は無料になる。さらに組合が運営する食堂と銭湯の割引券がもらえるようになっている。労働時間が４時間を越える、又は夜勤に就けば追加で手当てが付く仕組みだ。

軍人の副業は認められていないが、宿泊先で宿泊に必要な最低限を稼ぐまでに留めて営利活動に該当しない（例えば遊興費等を稼ぐことを目的としない）労働であれば、部隊長等に事前に申請して民間の住み込み労働施設で働くことは認められている。

ありきたりな事例を挙げれば、北国の民宿で雪下ろしを手伝うことで宿代を割り引いてもらう、ような扱いだ。

昨日同様に小坂家に泊まるという選択肢もあったが、タダで泊まるのは忍びなく、ホテルや民宿でもない一般家庭に金銭を払うのも何か違うというか……ヤラシイものを感じ、では家業を手伝うにしても牧場仕事は小坂家の家業ではなく、何よりも“１人になりたい”という願望もあって、博人はこうして２日目から自力で宿を得た

のだった。

（まさか牧場（こんなとこ）に来てまで鉄条網を張るとは思わなかったぜ）

今朝、何も知らない博人が集合場所に行けば、牧柵班の班長が現れて『あんたにピッタリの仕事だ』と言われて首を傾げていたら、こんなことになっていた。ちょうど、古くなった牧柵の交換シーズンにきてしまったようだ。

「いやぁ、さすが兵隊さん。手際が違うねぇ。やっぱり、訓練でよくやるの？」

折りたたみテーブルを囲んで座ると、その牧柵班長が重箱の中から取り出した柏餅とお茶を勧めながら、ニコニコと笑いながら話しかけてきた。４０半ばくらいの年齢だろうか？　筋肉質で頑丈そうな、山男を思わせるようなオヤジである。

出稼ぎや宿目的の短期契約では色々な奴が来るが兵隊さんは珍しい、と言っていたので、その珍客（？）に対して興味津々と言ったところなのだろう。作業中から結構馴れ馴れしい態度で絡んでくる。

節くれ立って肉刺だらけの手から柏餅と竹のコップに入ったお茶を受け取りながら、適当に返事を返す博人だったが、ふと周囲の様子を見回してある違和感に気づき、博人はそのまま疑問を口にした。

「ここ……馬用の放牧地ですよね？　なんで、羊がいるんですか？」

博人が小阪兵長から事前に聞いていた話では、この牧場は農耕馬や肉牛を専門に扱っているとのことだった。

だが、どういうわけだか時間になって放牧されたのは羊だったのである。

「去年から試験的に始めたんよ。食って美味いし、毛は使えるし、ああして集めた糞は燃料になるから、って。買えば高いから、うちで消費する分の足しになればってね」

班長が指差す先には、ピンク色のジャージを着た十代後半くらいの少年たちが熊手を使って羊の糞を集めている。連休中とはいえ時

期が時期だし、どこかの高校の農業体験だろうか？
羊の糞はちょっとした加工することで、ボイラーの燃料に使える。家畜の糞を加工した燃料生産はずいぶんと昔から研究されているが、今のところ羊の糞が最も効率よく燃料に変えられると言われている。班長の言う“うちで消費する分”とは、銭湯の燃料のことだろうか？

あれからまた皮手袋を嵌めて作業し、小休止を1回挟み、正午も近づいて日が高く上がり、額を汗がダラダラと伝うころになった。これから先、さらに暑くなってくるだろう。

本日の作業はあと１０分くらいで終わるだろう時間になって、牧柵を設置している牧場とその外との境界線に古い小道を見つけた。その先はずいぶんと昔のものと思われる落石で塞がっている。

その小道の脇に、朽ち果てた看板が転がっている。

辛うじて読めた掠れた看板の文字を見て、博人は首を傾げたあと、改めて自分のいる場所を広く振り返った。

広い敷地の中には草原の他に一定量の森林があり、小さいが池も点在し、草に覆われそうになりながらも辛うじて砂地もあった。羊が、馬が、牛が、仕切られた中でノンビリと歩き、時に走り、草を食み、鳴いている。

そんな草原全体を見渡せる小高い位置に、昨日寄った銭湯を含む建物が建ち並んでいる。今朝、集合したのもそこで、建物の殆どが渡り廊下で繋がっていて、牧場の管理事務所や食堂、広いロビー、宿泊可能な部屋まであった。

ところどころ改装・補修されてはいるものの、それは１００年近く続く施設である。

管理事務所の前にあった額に納められた古い写真に、金属性の棒を振り回している男性が写っていた。それを使って、小さな球を飛ばしながら目的地まで運ぶ遊びらしい。だから広く開豁した土地が必要だったそうだ。近くの記念館に、写真に写っている道具が展示

されているそうだ。
正直、何が楽しいのかわからない。博人の祖父が現役の頃くらいから愛好家は大きく減少していたそうで、『何が楽しいのかわからなかったが、楽しんでる奴は本当に楽しそうだったなぁ』と言っていた。

『●●●●ゴルフクラブ』

小道の脇に転がる看板には、そう印字されていた。

25　牧場（後書き）

ゴルフ場を牧場に、という発想は、調べてみると私以外の方が結構前から考えていたようです。一部、実現されている所もあるのかもしれません。

昔は開発の度に環境破壊だと言われていたようですが、実際のところゴルフ場は自然に溢れているようです。

法律によって一定の森林を残すように定められ、敷地内には砂地（バンカー）、池があり、芝草が生い茂り、適度に人の手が入ることで昔の里山に近い自然と生態系が保たれ、絶滅危惧種とされる動植物も確認されているようです。

しかし、ゴルフの愛好家はゴルフ場の数に比して減少傾向にあるとか？　このままでは廃業・閉鎖され、誰も手を入れることがなくなり、荒れ地となり、敷地内の生物の多様性は失われるのでしょうね。

牧場でなくとも、有効な転用方法（自然公園とか？）をみつけて管理が継続されれば良いのですが……。

ちなみに昔……某ミリオタ団体が荒れ放題のある河川敷をサバゲー場として管理したい、と市役所（？）に申し出たところ、却下されたそうです。

その向かいの河川敷は野球場にしたことで綺麗になり、色々な生き物が住み着いたそうで、それに習って環境保全（？）にと提案したらしいのですが……。

無許可で河川敷をゴルフ練習場にして管理し続けた老人団体もありましたね。チラリとニュースで見たら、実に立派なものでした。

たまに仕事で山に入るのですが、人の手が全く入らず野放しにされた山は、酷いもんです。上司曰わく、生活の中で薪や腐葉土の利用が減り、痩せた土地を好むイグチなどのキノコが減ったそうです。

山も河川敷も荒れ放題にするくらいなら、もっと有効かつ綺麗に使えるようにできないものだろうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4594bt/

銀輪軍曹の訓練手簿（仮）

2015年11月4日03時22分発行